

## 明治期戦争劇集成

メタデータ	言語: jpn 出版者: 日置貴之 公開日: 2021-03-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 日置, 貴之 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/21580">http://hdl.handle.net/10291/21580</a>

三代目 勝 諺蔵 作

# 日本大勝利



## 序幕

序幕

朝鮮京城南大門の場

日本公使館の場

清国公署門前の場

役人替名

- 一 大富公使
- 一 袁世凱
- 一 李容植
- 一 官妓楼主陽喜成
- 一 山本順三
- 一 桂貞吾
- 一 明治亭和助
- 一 商人幸七
- 一 同徳蔵
- 一 支那人 六人
- 一 日本歩兵 八人

## 朝鮮京城南大門の場

本舞台平舞台。向ふ朝鮮京城南大門より市街を見たる夜の中遠見。日覆より灯入の月をおろし、爰に和助、和服、料理屋の亭主の拵らへ。幸七、徳蔵やはり和服、商人の形りにて立懸り居る。此模様太鼓入、日本の騒ぎ唄にて幕明く。

幸七 明治亭の親方、今頃何所へ行被成る。

徳蔵 相替らず君の所は賑やかだね。

和助 あんまり癪に障つてたまらないので、耳を塞で表

迄出て来たのでムリ升。

兩人 それは又どふいふ事で。

和 聞ておくんない。今夜の客は支那の銀行のやつで、よく是迄はちよいく遊びに来たくわい天窓でムリ升が、今度の事件が起つてから日本人の家の敷居はまたがねなんぞとぬかした豚尾が今夜どかく、押込んで来て、芸者も日本を出せ、いふて聞かしてやる事があるなぞといひやあがつて、あの通り底ぬけ騒ぎをして居るのでムリ升。

幸 実に豚尾漢の国家的思想のないは今はじまつた事で

もなければ、既に韓廷も大鳥(ママ)公使の勸告を容れられ、袁世凱の鼻の明たは、今更我らがいふ迄もない事サ。

徳 それに付ては清国もふだん国の大きいのを鼻にかけ、影弁慶を極めて居たほらの駄味憎に對しても、此俣そふかと指をくわへて引込む訳にも行まいと高をくゝつた豚尾づらめ。今にも戦争のはじまる様にお国柄(ママ)の臆病風に吹立られ。

幸 此京城はいふに及ばず、仁川のちやんく、迄追々尻に帆を掛けて国へ逃歸るその中に、芸者を揚げてふざけるとは、肝のちいさい豚尾のうちにも。

兩人 ずうくしいやつがあるものだね。

和 サアそれが癪に障つてたまらないのでムリ升。今もぬかす事を聞て居れば、たとへ日本が韓廷をおびやかしてどんな事を勧めやうと、又朝鮮がどんな事を受込ふと、それは当座の一寸逃れ。後ろには我支那といふ大国が控へて居れば、日本如き瘦腕で此朝鮮の改革が出来ると思ふがめくら蛇におぢぬも程のある事。今に長い尾を巻いて泣づらかわくは知れた事。それも長い事ではない、速くも翌か今夜の内には必

らず日本人が色を失ひ腰をぬかす事があるだらふ。その時眼でも廻らぬ様にいつて聞かして置くのだと、国を自慢の悪口たらく。実に聞て居られぬので、内を飛出して来たのでムリ升。

幸 そんなら豚尾めが。

兩人 そんな事をぬかしやアがつたのか。

和 まだそれ計りではムリ升せん。我国の居留人などは、そふいふ事を知らぬゆへ、あわてさがして家を畳み、追々本国へ帰れども、我仁川の本店扱は外国人の預り金も多くあり、巨万の金の積である銀行なれば、若し危ないと見るならば仁川の本店は無論、此京城の支店に於ても第一番に用心をせねばならね共、その奥の奥がとうつて居るゆへ、平氣でかうして芸者を揚げ、酒を呑んで居るとの事。シテ見ると是は何でもめつたに安心は出来升せんぜ。

徳 成程、そふ聞て見ると思ひ当る事がある。此程世間の噂サ聞けば、清国の密使が此京城へ入り込んだと

いふ事もあり、既に容れられた内政の改革もどふか様子ががらりと變つて大鳥(ママ)公使へ韓廷から申込まれた事もあり、今聞けば又候外務協弁李容植氏が韓

廷の公文を持って日本公使館へ行かれたとあれば、てつきり是は袁世凱目が又も閔泳駿を抱込んで、あいつが陰で糸を引、例の小刀細工をやらかしたに違ひはない。

幸 是はそふかも知れないね。実に日本の臣民は取るに足らぬ我々に至る迄、成るべく平和に納まるを希望して、豚尾漢の小面<sup>ラ</sup>の憎さを胸をさすつて堪へて居たが、どふでも是は兵力でやつらの肝魂をひしがぬ内は、到底眼の覚るぢやんくでないから、イザ鎌倉といふ日にはたとへ相手が清国でも、高の知れたうどの大木。山椒は小粒でもしりくと辛ひ大和魂を見せて遣ふと商人の我々でも売る喧嘩なら買ふ気なれど、時節がら粗暴な事をしてはと居留の本邦人申合せて身を慎んで居れば、いゝと思つて附上り。

徳 そんな事をぬかすを聞ては。

兩人 弥堪忍袋の緒が切れた。

和 モシく静かにおしなさい。もしもそんな事が聞へると、どんな間違ひにならふも知れ升せん。腹の立つのは此和助もおなじ事。マア兎も角も虫押へにわしが所で一つぱいお上んなさい。

幸 成程それではモウ一つ、虫を殺して。

徳 酒でも呑んで気を晴らそふか。

和 それではお二人さん。

兩人 明治亭の親方。

和 サア、お出なさい。

トやはり騒唄にて三人上手へは入る。此仕組よろしく右の唄にて道具ぶん廻す。

### 日本公使館の場

本舞台平舞台、西洋室の飭付。正面に兩陛下の掛額。此前テーブルに花瓶を置、花ガスを点し、舞台一面に花氈を敷詰、都て日本公使館応接の間の体。上手に李容植、朝鮮正服形りにて椅子にかゝり、下手に大富公使、正服にて公文を読居る見得。此模様、奏楽にて道具納る。

大富 国王殿下よりの公文、大富圭助謹で拝読仕れり。

容植 先<sup>キ</sup>にも公文をもつて申入れたる通り、貴国の提議にかゝる内政改革案は、韓廷の喜んで容らるゝ所といへ共、今日の如く大兵を駐屯せらるゝに於ては

国民おのづから危懼し、治安を紊乱するの憂ひあり。依て貴国撤兵せらるゝならば、韓廷はその後に於て自ら改革を執行せん国王の尊慮。此旨篤と御承知ありたし。

大 その義は予て承知仕れど、已に韓廷我帝国の勧告を容られ、猶提議案をも粗御採用に相成りしに付、その旨直ちに電信を発して我政府へ通知せり。然るに仰せの如き公言を承るに至り、猶又今日かくの如く、「韓廷もし日本の提議に従ふに於ては、各国陸続兵を派して要請するに至るべく、韓廷その処置に苦しまざるを得ず。依てまづ日本の兵を撤回し、日本の提議に係る改革案をも撤回せられたし。韓廷はその後に於て心任せに改革を執行すべし」とある今日の公文。韓廷今日に至つて内政の改革要請を拒絶し玉ふは、恐れながら大富圭助甚だその意を解せざるなり。

李 とは又なぜでゝる。

大 さればなり。そも朝鮮の独立を公認して、是を世界各国に紹介したる者は我日本帝国なり。しかして欧米各国が朝鮮をもつて独立国とみなし、是と修交好交

条約を締結するに至りたるもの、我日本嚮導の力にあらざるや。然るに韓廷、我兵の撤回を求め玉ふは何ぞや、日本の出兵は居留人民の保護の為のみにあらず、貴国の独立を担保するを第一義となすは何人も疑わざる所ならん。是隣国の交誼をぞんじてのゆへなればなり。殊に日本は朝鮮に兵を置くの権利あり。それに対して欧米各国兵を派して何事を申出、韓廷を苦しむるいわれのあらんや。

李 スリヤ公使には我政府の要請をこばみ召るか。

大 決してこばむとははらねど、既に韓廷我日本の提議を容られ、殆ど十の七八迄運びし今日の只今に至り、かゝる公文を下し玉ふは、我政府を偽りし者なり。

李 や。

大 その義ならば我政府も覚悟致す所あらん。不肖ながら圭助、韓廷の要請には応じ難しと、此よし御回達下されたし。

ト急度いふ。李容植、大富の顔を見て決心の体に当惑せし思入あつて気を替へ。

李 然らばその趣、立歸つて言上致さん。

大 お役目御苦勞にぞんじ升る ○それお立成るぞ。

トうしろにて。

大 ぜい ハア、。

李 左様ムらば、大富公使。

大 外務協弁李容植氏。

李 是では所詮。

大 ア。

李 お暇申。

大 まづく。

ト大富見送り、李容植投首をして奥へは入る。直に橋懸りにて。

兩人 どふか暫らくお控へ下さい。

ト誂らへの合方に成り、橋懸りより袁世凱、

支那服の形り、山本、桂兩人洋服にて捨て

りふを云ひながら付添出て来り。

袁世凱 何もそふ取次など、むづかしくいふには及ばぬ。公用に附て参館したのではなし、今夜は袁世凱

一己人の資格をもつて訪問したのじや。

山本 デござい升せうが、主人には近頃。

桂 頗る公用繁多にて。

袁 そふであり升せう。当節柄御繁多はお察し申。

ト奥より大富出て来り。

大 是は袁大人、よくこそ。

袁 イヨウ大富先生。過日は各国の公使と共に結構なる

御饗応を受し彼の晩餐会のお礼に早速出ねばなら

ぬ筈の所、折悪敷く熱病にかゝり、それが為誠に失

敬。

大 その御不快のよしは承つており升たが、シテ御病氣

はいかゞであり升。

袁 よふく、回復致したので、一寸今晚お礼に出升た。

大 イヤそのお礼では痛み入升。どふかそれへお掛け下

さい。

袁 御免を。

ト椅子にかける。

大 コレ、世凱氏へお茶を。

兩人 畏つてムリ升る。

袁 イヤく、決してお構ひ下さるな ○

ト兩人は橋懸りへは入る。

定めて先生には御多忙であり升せう。

大 イヤモウ何やら用が嵩むと計りで。

袁 それに附ても目今氣楽なは拙者でゐる。過日、總理

衙門に於て各国の使臣が會議を開かれし節、我等は右病氣の爲に出席をせざりしが、跡にて聞けばその席にて某国の公使のいわるゝには、此袁世凱は清国の公使として朝鮮に駐在をするにあらず。又清国の領事として駐韓するにもあらず。直隸省一州の道台にして、只朝鮮駐在官を兼ねのみ。故に各国使臣と同一の責任ある者にあらねば、今後各国使臣の会合するにも、断じて袁世凱を加ふべからずとの発言により、終に一致をもつて以後各国使臣の會議には此袁世凱を加へざるに決せしとの事。我等その事を聞、甚だ不平に堪へざれども、その頃病氣の事ではあり、返つてそれが幸ひと十分保養を加へしゆへ、病氣も快復致してゐる。

大 まづ、成丈お柴を被成るがよろしい。公使附合も随分下(マ)さらぬものであり升から。アハ、ハ、ハ、ハ、ハ。左様く。それゆへ我等もいふべき苦情を鳴らさず

に、いふが俛に退いておるも、仰せの通り暑サ時分は猶更の事。○イヤ、暑サといへば定めて在韓の貴国の兵士も此暑氣ではたまり升まい。それが必用で

もある軍隊ならば又兎も角もでゐれ共、最早東学党乱民も鎮定致してゐれば、貴国の人民保護の必用もゑるまい。その用もなき兵を分けて暑サの甚敷朝鮮にとめ置くは、いわば無益の殺生と申もの。早々引揚げさせたがよくゑらふ。此暑サにたまつたものではゑるまい。

大 ム、我兵を撤回させと仰せあるからは、定めて貴国の出兵をも。

袁 イヤく、我清国の兵に於ては韓廷の依頼を受け、出したる兵なれば、乱民をことごとくかり尽し、それぐ、処分をいたせし上ならでは。

大 撤兵せられぬと仰せ被成るか。

袁 いかにも。韓廷護衛の爲の兵なれば。

大 然らば我國の兵もその通り、貴国の兵が先じて撤回あらば知らぬ事、左もなくば我兵を撤回さす事、相成り申さぬ。

袁 コハ心得ぬ貴殿の仰せ。我清廷こそ依頼を受けたれ、貴国の敢て関係なき者ではゑらぬか。

大 関係なしとはいわれまじ。

袁 とは又何ゆへ。

大 貴殿、天津条約を御ぞんじないか。

袁 ヤ。

大 天津条約の一節に曰ク ○ 将来朝鮮国若し変乱重大の事件ありて、日中兩國或は一国兵を派するを要する時は、一応まづたがいに行文知照すべし。その事実たるに及びては、仍則撤回し、再び留防せずとあり。然らば賊軍鎮定せば、たがいに撤兵すべき筈なり。その賊蜂起し、一ト度び猖獗を極めしは、何ぞや韓廷の政は外戚にありてほしいまゝに苛政を行ひ、官吏又貪つて飽くるを知らず。かるがゆへに国民塗炭の苦に落入り、悪魂こつて党をなし、終に国を乱すに至れり。然るに韓廷かばかりの区々たる内乱を征討する事あたわず、援を外邦に請ふ。是独立国の政府たらんや。国辱是より大なるはなし。依て我政府、隣邦の義を尽し、韓廷の内政改革を勧促したり。

袁 それはいらぬお世話ではゐらぬか。朝鮮は我清国の藩屏なり ○ とサ、申さば又も天津条約を持出さる同じでゐらふが、朝鮮自ら我に属せり。左すれば改革など行わでかなわらずば、我中国預つて是を行わん。

それを何ぞや貴国に於て嘴くちばしを入れらるゝは、いらぬ差配と申もの。

大 イ、ヤ、若国のいかんを知らざるやからは左も申べけれ、朝鮮国王殿下には決して貴国の属邦たるを甘んじ玉わず。然も此程朝鮮は独立国なりや否やを問ひ奉りしに、国王自ら独立国なりと答へ玉へり。是表明するに足る十分の証ならん。

袁 シテ、もし韓廷我清の属国なりと回答したらんには、いかゞ召さるぞ。

大 ハテ知れた事。左あらば我政府には是に對する準備策のなからんや。

袁 然らば貴国は飽迄も朝鮮政府に干涉なし、内政の改革をせらるゝよな。

大 仰せ迄も候わず。朝鮮の形勢を見るに、將さに亡国の状態に落入らんとす。実に恐るべきは門閥政治の悪弊なり。故に此度の国乱もすべての事案を妨害するに基けり。依て此門閥政治を廃し、賢能を挙げて愚蒙を退け、人才を登庸して、賄賂をむさぼり遊惰にふける官吏等をしりぞけなば、人民業を安んじて国法を犯す者なきは天然自然の道理なり。兎も角朝

鮮をして開明の域に進ましめ、以て十分独立国の元氣を保たしむるには、官制の改革を行ふより外なし。依て我政府、韓廷に勧告なし、新内閣を組織せしめんと欲し、而して独立を扶持するは、我國の義なり。もし朝鮮の独立を妨げんとす者あらば、是友邦の公敵なり。たとへ韓廷援を請わざればとて、豈義の為に黙止せんや。左すれば我兵をとゞむるは必要なしともいわれまし。何と袁大人、左様なものではムらぬか。

袁 ム、然らばもし我中国、貴国の提議に反対して韓廷をさしとめなばいかゞ召る。

大 左もあらば止むを得ず、日本政府干戈に訴へ、貴国の同意を求むる迄。

袁 スリヤ、我支那の大国を敵となしても。

大 我国小にして兵微なりといへど、いわゆる大和魂なるもの、四千万の臣民にそなわり、義の為には日本全国を焼土となす共、愁ふる者一人もなし。大国何ぞ恐るゝに足らんや。

袁 左程迄の決心とあれば、撤兵はせられぬよな。

大 韓廷改革をせざるうちは、五年十年廿年でも我兵は

いつかないかな。

袁 撤兵せずば、我支那の力を持つてしりぞけみせう。

大 見事帰国が。

袁 おんでもない事○

ト双方息込み、顔を見合せて氣を替へ。

ハ、ハ、ハ、ハ。是はく、何の根もなき雑談に花が咲き、甚だ失敬な事を申た。元より貴国と我国とはいわば唇齒の間柄。何とて兄弟垣にせめぐが如き不束な事を致そふ。只いつ迄も御交際を厚うせん事、我中国の希望致す所。わけて閣下と僕との交りは、平素父子の如し。閣下は父にして僕は子なり。定めて國際上の事に附ても、閣下の意にかなわざる事もムらふが、そこが幼稚の子と思召て、わるい所はお叱りも下され。又御教示にも預りたい。かならずどこか大鳥閣下、只今の失言はお心におさへ下さるな。

ト俄にへつらふこなし。

大 左様に仰せ下されては、返つて此方痛み入升。麁言のお詫びは手前より。

袁 是はしたり。閣下く、それでは世凱恐入升。只今

の事はほんの当座の浮世雑談。兒戯のほたへとお聞

捨下され、猶此上共隔心なく。

大 申談ずるでムらふ。

トいぜんの山本、桂出て来り。

山本 麴茶ではムり升るが。

兩人 どふかあちらへ。

袁 おもてなしは忝うムるが、御多用中心なく長居致す

も御迷惑。最早お暇致すでムり升せう。

桂 左様でもムり升せうが、折角お茶の。

兩人 支度をば。

袁 それは又翌の夜でも参つて頂戴致そふ。

大 スリヤ袁大人にはお歸りでムるか。

袁 お邪魔ながら又お咄しに参るであり升せう。

大 どふか御遠慮なくお出下さい。本国より大勢参つて

おれば、随分貴殿のお相手に。

袁 ヤ。

大 イ、お咄し相手に成る者はいくらもムる。

袁 イヤモウお賑やかな事でムる。

大 左様ムらば、袁世凱大人。

袁 大富先生。

大 それ、お附添申せ。

兩人 ハア、。

ト袁世凱思入あつて気を替へ。

袁 お暇申。

大 御免下さい。

ト兩人付添、袁世凱思入あつて橋懸りへは

入る。大富跡を見送り、思入あつて。

大 小才覚のあるに任せて心を引き見に来りし袁世凱

よくちよこまかしたやつではある。ハ、ハ、ハ、ハ、。

ト橋懸りより山本、桂出て来り。

兩人 お歸りに成りますてムり升る。

大 そふか○別当に馬の用意をするやうに申せ。

山 ハツ、御前にはどれへか。

兩人 お越しにムり升るか。

大 先刻の公文に付、是より王城へ乗り込んで、最期の

談判。

兩人 エ、。

大 早く致せ。

兩人 ハツ。

ト兩人は奥へは入る。大富は椅子を放れる。

此模様よろしく道具ふん廻す。

清国公署門前の場

- 本舞台平舞台、真中に用門の附し支那風の門。上下塗塀、尤上手の塀折り曲りに飴り、往來の模様。下手に大木の松。門の内に清国の国旗建、都て清国公使館の体。爰に陽喜成、韓服妓樓の亭主にて立懸り、門の内へは入らふとするを、公使館の支那人二人、是をさゝへて居る。此見得、誂らへの鳴物にて道具納る。
- 陽喜成 それでは困り升く。
- わからぬやつではないか。主人には御不在じやといふに。
- △ お下げ金が願ひ度くば、翌でも来い。
- 陽 イエ、翌迄待て居られ升事なら、今夜かうして参りは致し升せぬ。それと申も、聞けば御夫人にも御愛妾にも御帰国被成れたとの事。して見れば袁世凱さまもいつ何時お歸りに成らふも知れぬ、あぶない当節柄の事なれば、是非今晚纏頭を頂戴して歸らねば成り升ぬ。
- 是は一体どふしたのであり升。
- △ サアお聞被成い。此程御病氣の御保養に御酒宴をお開き被成れた節、両度官妓を招だ事があり升せう。
- 左様く。
- △ その纏頭の請求に來たのであり升。
- そふであり升か。それでは猶更御不在では。
- 陽 何のお留守の事がムリ升せう。此間招かれ升た子供が歸つての咄しを聞けば、世凱さまの御病氣は偽りで怪病（仮）との事。
- △ コリヤ、何をいふ。だまらぬか。
- 陽 サア、いふなどおつしやるならいひ升まいが、世間へは御病氣と触れて、誰が來てもお逢ひ被成らぬとの事なれば、御不在の筈がムリ升ぬ。
- イヤ、今、日本公使館へお越しに成て、全く御不在に違ひない。
- 陽 そんなら日本公使館へいつてお目通りを願ひ。めつそふな。日本公使館へ往てその様な事をいわれたは、主人の恥のみならず、我中華の恥辱といふものじゃ。
- 陽 イヤ、恥も外聞も御遠慮申してはおられ升ぬ。参り升く。

- △ コリヤく、待てく。実は今お歸りに成り升た。
- そんならお歸りに成つたのであり升か。
- △ 今裏門からお歸りには成たれど、お目通りをゆるしては面倒とぞんじて。
- 成程そふでもあり升が、爰で彼はいわしては返つて面倒。
- △ それではゆるしてやり升せう。サアこつちへ来い。
- 陽 それ御覽被成れ升せ。実に支那人の横着には恐入るわい。
- 兩人 エ、だまつて来い。
- 陽 へい。
- ト合方にて三人小門の内へは入る。暫らくして大門を開き、内より支那人の僕二人、長持をかつぎ、外に大きな支那カバンを背負ひし支那人二人出て来り。
- 是は一体どふし他の有ふ。今日本公使館からお歸りになるがいな、足元から鶏の立つ様に荷拵らへをおさせ被成れて、今夜俄に御帰国被成るとの事。
- △ いづれは深い様子のある事で有ふが、十年此方朝鮮で袁世凱といわれては飛ぶ鳥をも落す程の勢ひ盛
- △ 此程川船でお出被成れた御愛妾をば、仁川で待合せ、我國の軍艦にて一所に御帰国被成るとあつて、裏門から出る者もあれば又かうして行くも人目を忍ぶ落人同前のありさま。
- × 何にしても、急げとの仰せなれば、人の眼にかゝらぬ内、早く出かけ様ではあるまいか。
- 三人 それがよい。
- × コレ、静かにせいやい。
- ト四人向ふへは入る。上手よりいぜんの山本、桂、日の丸の印附きし手丸提灯を持、大富馬乗にて、兵卒八人銃を持、前後別れ護衛して出て来る。是をバタ／＼に成り、門の内よりいぜんの陽喜成血汐に染みたる白の下着形りにて走り出て来り。
- 陽喜成 助けて下さり升せく。
- 山・桂 何だく。
- 陽 私は官妓の楼主陽喜成といふ者でムリ升が、此支那公署の袁世凱さまが二度迄お呼び被成れた官妓の揚

代をお払ひ被成らぬのでムリ升。それゆへ今晚参つてその纏頭のお払金を督促致し升た所、袁世凱さまが眼をむき出しおつしやるには、おのれもし国王が官妓を聘するも、猶よく纏頭を促するや。我は国王の師父たるを知らざるか。無礼なやつじや。その罪はゆるされずと、他の者にいひ附けて衣服をはぎ取らせ、コレ御覽下さり升せ、此通り皮肉の破れる程鞭答を加へし乱暴狼藉。命からぐゝ逃げて参り升たが、今にも爰へ追ふて来て、どの様なめに逢わすかも知れ升ぬ。どふぞお慈悲お情にお助け被成て下さり升瀬。ハア、。

ト大泣に泣く。

山・桂 御前、お聞被成れ升たか。

大富 見れば余程手いたく打たれた様子。気の毒な事じや。介抱して遣わせ。

山・桂 畏つてムリ升る。○コリヤ怪我は何所じや。

陽 何所といふ事はムリ升ぬ。所嫌わめめつた打に、此様な目に逢わした上、金も払わず夜逃げとは、ひどいやつではムリ升ぬか。

大 何と申。スリヤ袁世凱には。

陽 何でも今夜俄に国へ歸る様子でムリ升る。大ム、。

ト考へるこなし。

山 中華と自ら尊称なす大國の使臣たる者。

桂 その沙汰もなく歸国といひ。

山 剩さへ芸者の。

兩人 喰逃げとは。

ト此内門の内より袁世凱、平人の支那服にて蝙蝠傘を持、いぜんの○△の兩人大カバンを提出て来り、大富の同勢を見て恠りなし、こそくと花道へ行。陽喜成、是を見て。

陽 袁世凱の大泥坊め。

ト是を聞、袁世凱舞台へ息込み、大富と顔を見合せ、袁世凱は傘を開く。大富は手綱を控へる。是を双方一時の木の頭。

大 言語同断なやつじやな。

ト袁世凱は傘にて身を隠し、向ふへは入る。大富は跡を見送る。此仕組よろしく合方にて

ひやうし満来

著作  
勝彦蔵

二幕目

日本大勝利

二幕目 監理衙門獄舎の場

二幕目

監理衙門獄舎の場

役人

一 監司李成徳

一 金炳直

一 金玉均夫人ユ愈氏

一 同令嬢端陽

一 洪鐘宇

一 権東寿

一 権在寿

一 僕従 二人

一 監吏 二人

一 獄丁 壹人

竹本連中

## 監理衙門獄舎の場

- 本舞台平舞台、上手朝鮮風の獄舎。前側錠をおろせし入口。下手落間の番小屋。正面腰掛。此内に椅子二三脚、筵など置あり。此側に車井戸。所々に大木の樹木。向ふ立並びし監房邸内遠見。都て朝鮮洪州監理衙門獄舎の体。爰に官署の僕二人、朝鮮服にて○は箒を持、掃て居る。△は立懸り、莨を呑み居る。此模様、ヂヤンくの時の鐘にて幕明く。
- △ コレ東偏朴、掃除は大がいにして置んかい。此朝鮮はきたないのが名物。何もけふに限つてはき掃除をする事はないは。ほつて置けく。
- 是が常ならほつても置くが、定めて貴さまも聞たで有ふが、禁府都事金興集<sup>コウ</sup>さまからのお達しには、今夜洪鐘宇といふ人が、全国官衙を視察に廻らつしやるに付、鄭重に取扱へとの予てのお達し。所が最前お着に成たと聞たゆへ、鹿相があつてはなるまいと、そこでかうして掃除をして居るのじや。貴さまもちつと手伝てくれ。
- △ その洪鐘宇といふは、いつぞや支那の上海で金玉均を殺したやつじやないか。
- コレ、静かにせんか。その事は必ず此監房につないである親妻子に聞かす事はならんと、監視長より堅くいましめられてあるではないか。たしなめく。
- △ 違ひない、そふで有た。その功に依て今度輔国宰相に任せられるとの事。それゆへの廻国と聞ては、元の身分は兎も角も、今の所では鹿略には出来ぬでないか。
- 成程、人の運といふものは知れぬもの。系らい立身をしたものじやな。
- ト△向ふを見て。
- △ アレく噂<sup>ウザ</sup>をすれば影とやら。監司長が付添ふて、最うそこへムつたは。
- それでは掃除はやめにして。
- △ 部家へいつて休めく。
- ト兩人橋懸りへは入る。向ふより李成徳、韓服、監司長の拵らへにて先に立、洪鐘宇やはり韓服、立派なる拵らへ、監吏二人、獄吏一人付添出来り。

李成徳 あれよりつゞきし棟々は皆当監署の獄舎にムリ

升る。

洪鐘宇 左様か。

ト皆々舞台へ来り、李成徳椅子を直せといふこなし。三人心得、椅子を持来り、能き所に直す。

李 まづ暫時御休息を。

ト洪鐘宇、鼻にてあしらひ、椅子に懸る。李成徳もおなじくかゝる。洪鐘宇、辺りを見廻し思入あつて。

洪 扱々何所を見ても不潔な事だ。此洪鐘宇、長らく日本におつて近頃帰国をして見れば、元に替らぬ国のきたなき。○といふて日本を誉るのではないが、諸官署はいふに及ばず、監獄内に至る迄、その清潔成るは実に感服。余も先達て我國の為に忠をぬきんで、大功をあらわせしに依り直ちに高官に登庸せらるべき所、日本に於て彼是議論がやかましきにより、我政府部内に於ても評議まちくにして決せず、やうく副修選に任ぜられたれど、それしきの事では此鐘宇満足せず。甚だもつて不平なりしが、今回閔

氏一統の周旋、且は我が器量抜群の力に依て大試の首選に当り、登科第一等の格に登り、既に輔国宰相にも任ぜらるべき資格を授けられたり。依て我職に就かば、まづ手はじめに各道の監司衙門より改良を行わんと、かく視察の為廻行せり。

李 遠路の御旅行、御苦勞千万に存じ升る。

□ 予てお噂サは承りしが、誠に尊大人の御登庸は。

× 前代例しなき御立身。

獄吏 数成り升ぬ我々迄。

三人 お浦山しうぞんじ升る。

洪 そりや、けなるくも思ふで有ふが、従来此科に登る者はいか成る門閥勢力のある者でも、一万貫乃至三万貫を要するものなるに、我一錢も費さずして、たやすく此科に登りしは、全く金玉均の事に附ての政府の褒賞。○イヤ、その金玉均といへば、彼が妻子、又親成る金炳直も当監衙の獄舎につなぎあるとの事。左様でムるか。

李 いかにも妻子は彼の甲申の事変の際より当監獄につなぎ置き、猶実父金炳直にも、過日禁府都事より逮捕あるべきの旨、達せられしに依り、捕縛いたして

則是成る監房の内に。

□ 妻子と共に。

三人 投獄を。

洪 スリヤ、金炳直を妻子のやからと。

李 同監をゆるすべき法はムらねど、金炳直には老年といひ、殊に盲目成るがゆへ、介抱致し度しとある妻子の者が哀訴により、その心根を察しやり、ゆるし遣してムり升る。

洪 それはあまりゆるがせな計らひではムらぬか。彼れ等は天地容れざる大逆賊の親妻子。その罪三族に及び、従類ことごとく死罪に処せられし中に、彼等のみ処刑のいまだ定まらず、拘囚の俛置かるゝは、是も全く日本党のやからの所為。貴辺とて彼等が罪を余も知らぬ事はムるまい。

李 いかにもよくぞんじ罷あれども、たとへいか成る重罪人たりとも、舅を思ふ女の操、孝道は捨てられぬではムらぬか。

洪 もし後日に至つてお咎めあらば、何と召る。

李 その時は李成徳、一命をさし出してお詫びを致す迄の事。

洪 ヤ。

李 御心配は御無用に預りたし。

洪 ム、然らば金玉均妻子の者を是へお引出し下され。

李 何ゆへ彼等に御面会をば。

洪 チトいひ聞かせ度事がムるゆへ。

李 いか成る義かはぞんぜねど、金玉均が事に於てはいまだ彼等に申聞けてムらねば、成るべくは御用捨に。

洪 スリヤ、此義も貴殿はこばみ召るか。

李 全く左様にはムらねど。

洪 然らば早く引出し召れ。

ト急度いふ。李成徳、是非なき思入あつて。  
李 いかにも仰せに随ひ申さん○それ金玉均が妻子の者を。

獄吏 畏つてムり升る○

ト鍵を出し、上手の獄舎の鍵を明け。

金玉均の妻兪氏、娘端陽、是へ。

三人 出ませい。

ト監房の内にて。

兩人 ハア、。

ト是より床の上〔浄瑠璃〕るりに成る。

へむざんや金の夫人兪氏、娘も共に長々の牢舎に身  
さへ瘦せおとろへ、有りし昔の俵は泣きの泪に送  
る日の光りも見ざる闇黒道。此世の地獄とたとへ  
たる獄屋の内よりとぼくと、出る姿ぞ哀れなり。

ト獄吏、下手の番小屋の内より荒蕙を持来  
り、真中に敷。此内監房より兪氏、端陽、  
朝鮮服お仕着せといふやうな拵らへにて出  
て来る。

獄吏 下に居升せい。

ト兩人蕙の上に住う。洪鐘宇見て。

洪 スリヤ、わいらが金玉均の妻娘か。

兩人 ハイ。

李 イヤ何、兪氏、端陽。是成るは洪鐘宇といわるゝ仁  
なるが、何かその方等に仰せ聞けられ度事あるよし。  
依て是へ呼び出せしぞ。

へ物知らかに伝ふれば。

兪氏 シテ、私共へ。

端陽 仰せ聞けらるゝ。

兩人 事ありとは。

洪 外でもない、忝くも国王の外戚たる閔氏をはじめ、

韓、李、尹、趙六家の人々を失ひ、此朝鮮をくつが  
へさんと、及ばぬ謀反を企てし天罰忽ちその身に報  
ひ、非業に死したる金玉均がくたばりざまをいひ聞  
かしてやらふと思ふて。

へといふに悔り。

兩人 エ、。

李 コリヤく、必らず共にうらたへな。その義申聞か  
せなば、その方等は婦人なり、父は目かいの見へざ  
る老人。嘸や歎き悲しまんと、今日迄深く秘し、知  
らせまじと思ひしが、実は先達て上海にて金氏はあ  
へなく最期をとげたり。  
へといひ聞かすれば、妻子は驚き。

兪 スリヤあの、夫は。

端 父上さまには。

兩人 ハア、。

へハツト気を打つ妻子より、様子洩聞父炳直。こら  
へ兼て走り出。

金炳直 スリヤ、我子金玉均には上海にて、死去致せし

とな。

兪 スリヤ、舅御さまにも。

兩人 只今の様子をば。

金 サア、聞けば浅間しき死をとげしとあるからは、い

づれ人手に懸つてゞも。

兪 お果被成れしものと。

端 思われ升るわいなア。

李 いかにも玉均には人手に懸つて相果たり。

金 シテ、我子金玉均を手にかけては。

兪 上みに於ての御成敗か。

端 但しは外に事故あつてか。

金 誰が仕業に。

三人 ムり升る。

へ涙ながらに尋ぬれば。

洪 誰でもない、金玉均を手を懸けたは、則ちかくいふ

洪鐘宇だは。

へ思ひも寄らぬ詞に悔り。

兪 何、夫、金玉均。

端 父上を手にかけては。

金 洪鐘宇といふ。

三人 御身とな。

洪 ヲ、サ彼れが大罪は今更いふ迄もなく、彼の甲申の

失敗より風を喰つて日本へ逃げ、身の災いをのがれ

しなれど、皇天なんぞ此賊を枕を高く寝かし置かん

や。我、日本へ渡航なし、手段を設けて金玉均を上

海迄おびき出し、旅宿に於てピストルにて。

金 スリヤ、玉均を。

三人 銃殺せしよな。

洪 いかにも鉄砲玉を喰らつてくたばつたは。

兪・端 ハア。

へハツト泣き入る妻と子が、歎きを余所に流石の老

人。更に動ずる気しきもなく。

金 尤、倅玉均は大罪を犯せし者。それゆへ親をはじめ

として、不便や妻子の者迄も十有余年がその間、浅

間しきかくのありさま。いづれ一命はなきものと兼

て覚悟の上なれば、敢て悔みは致さねど、せめてそ

の筋の手に捕われ、いか成る重刑に処せらるゝ共、

立派に死なば親も満足。妻子も歎きは致すまじきが、

洪鐘宇とはその名さへ聞も及ばぬ匹夫の為、あざむ

かれて死せしと思へば残念にゑるわい。

へ拳を握りし炳直が詞に鐘宇、眼尻立。

洪 ヤア匹夫とは無礼な一言。元は兎もあれ、金玉均を

殺したる功により、既に輔国宰相に任ぜらるべき資格を授かる今の立身。その洪鐘宇へ恐れもなく、舌長なる雑言過言。不礼があらばゆるさぬぞ。  
へと帯剣に手をかくれば。

李 アイヤ、洪鐘宇どのお控へあれ。金炳直も只今かゝる身には相成れ共、元は江陵府使成る者。失礼ながら拙者として今日御意得るそれ迄は、お名さへぞんぬそこ元なれば、彼れが過言も世にある時の身分を思へば尤至極。

洪 スリヤ足下には彼れが身びいきをせらるゝよな。  
李 決して左様な訳ならねど、入檻中は拙者が預り。もし鹿暴の事あらば、役目に対して某こそ用捨しがたき貴殿の振舞。

洪 ヤ。  
李 それではお為に成るまじと、おとゞめ申も拙者が寸志。麁言はおゆるし下されたし。  
洪 ゆるし難きやつなれど、何さま貴殿の詞も尤。命冥加なやつではあるわい。

兪 へへらず口なる雑言を聞くもかなしき妻娘。  
シテ、夫上海にて御最期おとげ遊ばせし。

端 亡き骸はいかゞ成り升たか。

兩人 お聞かせ被成て下さり升せ。

へ尋ねに成徳、眼をしばたゞき。

李 その頃噂に承りしに、日本人死骸を引取りたしとて、金玉均どの生存中懇意を結びし知己の人々、態々渡航せられしなれど、早死骸は本国へ引取りし跡の事にて、日本帝国の義士仁士の志も画餅となり、憐むべし金氏の死骸は刑戮後、分割して八道に転致せしが、兩足は慶尚道に送り、大邱宮門に右足をさらし、猶数日を経て右道に是を廻し、左足は左道各地に送りし後、南海のモーラン崎より終に海中へ投じたり。

へ聞くに妻子は身もよもあられず。

兪 スリヤ夫金玉均には刑戮の後、切り刻まれ八道に渡されて、右の足は大邱宮門にさらされ。

端 左りの足は左道各地へ送られて、遂に南海のモーラン崎より海中へ捨られしとは、扱もはかない御身の成行。

兪 舅御さま。  
端 おぢゝさま。

兪 お聞き遊ばし。

兩人 升たかいなア。

へ泪と共に取りすがれば、金炳直は見へぬ眼にあふるゝ泪を拭ひ。

金 此朝鮮の刑法として残酷成るは珍らしからねど、近頃例しなき刑に行われしは、あまりといへば。

洪 ヤア、あまりとは何があまり。金玉均ほどの大逆無道、その罪の所刑には、まだく、軽き上<sup>ミ</sup>の慈悲。やがてわいらもその通り、首は首、足は足、両手迄も切斷され、八道に渡さるゝはいわでも知れた事なれど、けふ迄生た慾にほだされ、若しも助かりもする事かと、思ふ心のあらば不便と態々是へ呼び出したは、金玉均が死さまを聞かせ、覚悟をさせん我情。有難いと思ふておれ。

金 へおのれが功を鼻にかけ、高ぶる詞を聞きもあへず。元より命はなき者と、覚悟極めし金炳直。今更汝が諭しを受けんや○コリヤ、嫁女。

兪 ハイ。

金 孫よ。

端 ハイ。

金 上<sup>ミ</sup>に於てはかく迄も金玉均を憎ませ玉へば、我々が死刑も近きにあるべし。そち達も金玉均が妻娘なれば、必らずその時にのぞんで見苦しき死をとげるなよ。人は死す共、名は未代。一<sup>ト</sup>度ひ臭名を残すといへど、元來金玉均が罪を得たるは、我朝鮮の獨立を計らん為の忠義心。終に事とげずして身は空しく成るとても、やがて悪名は美名と輝く時節の来るも遠かるまじ。只我々が身分は朝鮮の革命の犠牲に捧る万代不朽の礎と思ひ、嫁も孫も悦んで死に就けよ、ヨ。

へいひ諭<sup>メ</sup>すれば、泪ながら。

兪 その義は仰せ迄もなく、よう心得てはムリ升れど、浅はかな女子の愚痴には、義心に富たる日本の仁士、力を添へて玉われれば、たとへ此身等親子の者はいつ誅せらるゝ共、夫<sup>ト</sup>の一命につゝがなく兼ての志をとげ玉わば、此身は死す共恨みなしと、只我夫の御無事をのみ、祈りし甲斐も情なや。

端 死ぬと覚悟を極めたる、此身は今に長らへて、聞くもかなしき浅間しい御最期おとげ遊ばせし、父上さまのお心をお察し申せば嘸や嘸、御無念であらふと

思へば最期を清うする覚悟も、今はよみぢの障りと成り、わたしやかなしうムリ升るわいなア。

へ男増りの親と子も、流石女の愚に返り、悔み歎けば柄直も二人りが心察しやり。

金 そち達の歎きも道理ながら、玉均ほどの子を持し親といひ、妻子といひ。

兪 忠義が返つて仇と成り。

端 今の憂目を見る事も。

金 皆我々が因果ぞと。

兪 あきらめてはムリ升れど。

端 勿体ない事ながら、つれないお上<sub>三</sub>の被成れ方。

金 それも悔んで返らぬくり言。

端 母さま。

金 嫁女。

兪 舅御さま。

金 思へばはかない。

三人 身の成り行じやなア。

へ見かわす顔も見へわかぬ、眼にも泪の露時雨。晴間は更になかりけり。洪鐘宇腹にすへ兼。

洪 ヤア、上<sub>三</sub>を恨むよまい言。その了簡ゆへ老ぼれめ

が眼のつぶれたさまを見よ。アノ爰な罰当りめ。

へおのが威を張る鐘宇が暴言。傍若無人の振舞なり。

かゝる所へ当署の官吏、あわたゞしく走り出。

⊕ ハツ、申上げ升る。

李 あわたゞしい。何事じや。

⊕ 只今、禁府都事より国王殿下の伝言をもたらし、お使御入来。早々お越し被成れ升ふ。

李 何国王殿下よりの伝旨とな ○

ト合点の行ぬ思入あつて。

洪鐘宇どの、御免下され。

へ何事やらんと李成徳、知らせに随ひ出て行。

ト李成徳、監吏付添、上手へは入る。

へ跡には妻子が覚悟の眼くばせ。

兪 それ、娘。

端 合点でムんす。

兩人 覚悟しや。

へ無念こつたる女の一心。鐘宇を目がけ立懸るを、こなたも知れ者油断なく、二人りの女を取て押へ。

ト兩人、洪鐘宇に懸るを取て引付け。

洪 ヤア、返すぐも無礼な女め。コリヤ洪鐘宇を何と



ト早めの合方に成り、向ふより権東寿、権  
在寿、朝鮮服にて走り出て来り。

権東寿 洪鐘宇どの、そこにムつたか。

権在寿 大変が出来致した。

洪 誰かと思へば権東寿、権在寿。合点の行かぬその詞。

大変とは心元なし。是へくく ○

ト兩人舞台へ来る。

シテ、大変とは何事だ。

東 されば聞れよ。貴殿京城を出発後、どふいふ訳かき

のふ迄威勢をふるひし袁世凱どのには。

在 人知らぬ間に夜逃げをしられた。

洪 何、我々が杖柱と頼み切つたる袁世凱には、ちくて

んせしとな。

東 まだそれ計りの事ではない。俄かに政府の模様が変

り。

在 国王自ら大院君へ詔りを下され、則大院君参政と成

り、弥々新内閣を組織する事に極つた。

洪 スリヤ、日本の勧告通り、又も政府一変して大院君

迄起つたとな。

東 それゆへ閔氏をはじめ支那党の人々には、スハ一大

事とよろたへ廻り、日本公使大富圭助、兵を卒して  
大院君を護衛なし、王宮に赴かんとす途中、韓兵  
をもつて打退けんとなしたれど。

在 日本の勇兵には中々もつて敵しがたく、またくひ

まに敗北なし、終に閔氏をはじめとして、皆それく

に跡をくらまし、いづれへ逃たか行衛さへもしれぬ

始末。

洪 スリヤ我米櫃と思ふて居た閔氏にもちくてんせしと

な。ヤアくくく。

東 まだその上の頭痛といふは、金玉均と諸共に殺そふ

とした朴泳孝にも国王より召還の伝旨を日本へ発せ

られしとの事。

在 左すれば今に朴泳孝にも帰国するに違ひなし。あい

つが爰へ歸つて失せたら、貴殿は元より我々をも只

置かぬは極つて居る。実に泣面うらに蜂はちまといわふか。

東 身が氣遣ひゆへ。

兩人 知らせに來た。

洪 スリヤ、朴泳孝をも召還さるゝとな。ヤアくくく。

在 かういふ内もおたがひに。

東 身があぶない。逃げさつしやいく。

洪 そふ聞ては、コリヤかうしては居られぬわい。  
へはじめのぎせい何所へやら、あわてふためき逃げ  
て行。

金 思へば不便な。  
李 アイヤ、恩免の御書。

ト勅書をさし出すを木の頭。  
頂戴せられよ。

ト洪鐘字うろたへ、権東寿、権在寿一所に  
逃て向ふへは入る。

兪 はじめの威勢に引替へて。  
端 アノ逃げて往た見苦しい形りわいなア。

ト金炳直に渡ス。炳直是を頂く。女形兩人  
平伏する。此仕組よろしく合方、時の鐘に  
て

李 元より市井の無頼漢。恥を知らぬも怪しむに足らず。  
ハテ笑止千万。ハ、ハ、ハ、ハ、ハ。

ひやうし幕

金 それに附ても承れば、大院君起たれ玉ひ、国政改革  
に相成る様子。

著作 勝彦威

兪 我夫御存生にあるならば、嘸や悦び玉わんもの。

端 匹夫の為にあへなくも此世を過ぎせ玉ひたる。

李 金氏にも地下に満足せられん。

金 左は思へども、親の慾には忤を生かして置たなら。

兪 朴泳孝氏と諸共に。

端 再び花咲く春に逢ひ。

金 彼れも愁眉を開かんもの。

兪 かなしや特赦の召還にも。

端 歸るよしなき地下の父上。

### 三幕目

日本大勝利

三幕目 豊嶋沖功落号砲撃の場

三幕目

豊嶋沖功落号砲撃の場

役人替名

- 一 豊嶋大尉
- 一 清軍長官洪偕元
- 一 同士官陳朴平
- 一 同 晋退局
- 一 留学生勝尾勇
- 一 新聞社員速水伝
- 一 朝鮮人猛安信
- 一 日商人初野吉平
- 一 功落参謀趙正珏
- 一 日本水兵 大勢
- 一 同 水夫
- 一 支那兵 大勢

### 豊嶋沖功落号砲撃の場

本舞台向ふ一面の浅黄幕。波の音にて幕明く。

ト直に向ふにて。

留学生 サア君達、来玉へく。

ト矢張波の音にて向ふより日本人の留学生、着付短き袴形り、新聞社特派員、洋服帽子首掛革鞆をかけし形り、兩人共仕込み杖を突、其跡より朝鮮人、帽子朝鮮服の形り、次に日商人、着流しへコ帯帽子、矢張り杖を突き、何れも散歩の心にて出て来り、花道にて。

何と諸君、今度の事件に付、我日本に於ては朝鮮國の為に支那政府へ対する談判は、実に公明正大にして随分烈しかつたやうだが、実に愉快ではあり升せんか。

特派員 左様であり升。然シ僕等も今般の事件起りしより、我新聞社は疾くにも渡韓して日清の關係如何を、我同胞諸君に早くも知らしめん所の責任を担へ共、秘密の事は容易に探聞も出来升せんが、我全權公使

には朝鮮国王の委任を受け、支那の公使袁世凱に牙山の清兵撤去の義、談判に及ばれし所、公使の資格なき袁世凱なれば、自分一個の答弁が出来なくつて、だんまりで仁川より外国の使船に乗じて密かに本国天津へ逃げ歸つた事は判然してあり升。

朝鮮人 夫は私よく知つており升。其時一所に我国へ来て居升たチャンく等は俄に家内を引連れて逃て歸つた其姿は、あなた、見せ度く有り升た。私知つており升。日本暁斎の書た画の様であり升た。

日商人 それはその筈。第一公使たる者が逃て歸るといふやうな臆病な者だから、訳の分らぬ商人などは狼狽するは当り前。併し我々日本人は永らく爰へ渡つて来て商法をしており升が、今度の事件が起つてもちつとも騒がず安業に暮すといふも、全くは我政府の御威光で、国民をいたわつて保護をして下さる故であり升。

留 そこを思へば御同前に国恩を報ずるには、今にも日清交渉破裂して大戦争が起るも知れねば、其時には我国にも予備後備の兵隊も残らず出る事なれば、其遺族を救助の為、銘々身分相応の義捐金を差出すは

今日同胞の義務であり升。

特 そりや愛国心に富たる日本の事だ。ものいわんかて知れた事サ。而して我勢を強くし、日頃より日本を小国なりと輕蔑した豚尾漢の本国たる北京迄突抜て、日本男児が持前の大和魂しいといふものを一番見せて。

四人 遣り度いものだ。

ト此時大砲の音する。皆々急度なり。

留 ヤ、アノ砲声は慥かに海上。祝砲空発の音ではない。若シヤ日本軍艦と支那軍艦が沖合にて衝突したではあるまいか。

特 そふかも知れず、過日より支那軍艦の航海烈しく、又我艦にも今日頃二三隻仁川へ来るといふ噂サもあれば。

朝 何は兎もあれ、私案内、此海岸に沿ふて行き、あなた様子見る、よろしい。

日 それがよいく。

留 それでは諸君。

特 少しも早く。

四人 来玉へく。

ト四人勇み立、舞台の花道際より橋懸りへは入る。是を汽笛の音にて浅黄幕を切て落す。

本舞台六間大高。前面黒作り、砲門を備へし船縁り、上手を艦にして下手を舳先にしたる軍艦。是に帆柱三本建て、真中に烟突。汽笛管を建テ、煙突より蒸気の烟を出し、甲板の廻り鉄の手摺を付け、舳先に支那の旗章を掲げ、帆綱にも小旗を付け、都て清国軍艦の体。向ふ一面浪の大遠見。此前上手に白作りにて矢張り国旗を掲げし遠見の日本軍艦を釣出し、舞台一面に浪布を張り詰めたる豊島沖合の模様。爰に甲板の上に清国将官洪借元、支那軍長官の服装にて剣を帯び指揮旗を持、陳朴平、晋退局、士官の軍装にて剣を抜き持ち、此後ろに兵卒、喇叭吹いづれも浅黄色の服帽子を冠り、鉄砲、喇叭を持、立懸り日本軍艦を見て息込み居る体。此見得よろしく、喇叭の音、波

の音にて道具納る。

陳朴平 如何に將軍、あれ見られよ。我軍艦の航海中、

日本艦との衝突は願ふてもなき清国の威厳を示す時節到来。

晋退局 彼れの軍艦三隻を我一発にて打沈め、軟弱なる日本兵を皆殺しに致さんは我々進んで望む所。將軍の御異見は。

兩人 如何でゝる。

洪借元 我が清国皇帝より、いまだ一般開戦の詔勅は下らざれ共、予て総督李鴻章氏には万一航海中に於て日本艦の目にとまらば、彼れが油断を見済まして適宜の所置に及ぶべしと、予は内意を蒙り居れば、撃沈めるは苦しからねど、予は彼れの挙動をば注目致して、いまだ決せず。

陳 ナニ、取るに足らざる日本海軍。彼れ如何程の軍備あるとも、我軍には搭送号が牙山へ送る陸兵と東障、西隠二艦あれば。

晋 今開戦に及ぶとも、彼れは三隻、我は四隻。其上我軍、仏国と数度戦争にて鍛ひし精兵。將軍には速かに御英断あつて。

皆々 然るべし。

洪 士卒一同其意に決せば、先きんずる時は人を制すと、

当艦より魁けて砲発を始めなば、味方の三艦一声に

砲撃の致すは必定。左ある時には瞬間に我軍勝利疑

ひなし。

陳・晋 此上は猶予なく。

洪 それ打て。

皆々 パア／＼。

ト皆、砲発せんとする此時甲板の下、船内

より。

趙正珩 アイヤ、其砲発暫らく／＼。

ト矢張り喇叭の音にて、上の方甲板の下よ

り趙正珩、支那軍装、参謀の拵らへにて、

出て来る。皆々見て。

洪 そこ元は乗組趙正珩氏。

陳 シテ將軍の軍令を。

晋 何故あつて。

皆々 止めらるゝぞ。

趙 イヤ、お止め申は我國の為。必らず以て鹿忽なる開戦の義は無用に召れ。

皆々 とは又何故。

趙 されば、司令長官始め將校方にもお聞被成れ ○

ト幽めて清楽の音に成り。

今日当艦并に西隠号の勤めといふは、牙山駐屯陸兵

の非常に備へし軍艦にて、牙山湾に碇泊して守護す

るが本分なり。然るに今日太沽より牙山へ送る陸

兵を搭送号に搭載なし航海すると見たる故、海上無

事を守りの為、西隠、功落二艦共迎ひに出しものに

して、此方より亡状にも好んで日本軍艦を要撃する

の理あらんや。早く碇を引上て運転を命ぜられよ。

洪 アイヤ、双方均しく投錨して運転を止めしからは、今

此方より運転せば、日本艦に恐懼して逃走せしと認

められんは、我清軍の恥辱なり。殊に以て李総督の

命を蒙る上からは、是非此方より。

皆々 砲発なさん。

趙 アイヤ、たとへ李総督の内命にもせよ、いまだ日本清

国と国際の破裂に至らず。故に我皇帝より開戦の勅

も下らざりき。殊に日本軍艦には万国の公法を守り、

我軍艦に抗撃の挙動さへも見へざるに、不意に乗じて砲発なすは甚だもつて無礼なり。將軍、思ひ止ま

られよ。

洪 ヤア比興なる参謀が詞。たとへ宣戦の今出ざるとも、  
総督が命令こそ我為には皇帝の論言に異ならず。因  
循極まる参謀が如何で詞を。

皆々 用ひんや。

趙 コハ無謀なる所存かな。日本兵を軽蔑して軟弱なり  
と見なせ共、彼の日本は小国なれ共、我軍隊の如く  
なる亡状態極まるものならず。軍隊規律厳制にて、  
各国是を誉ぬはなし。今開戦に及ぶ共、鶏卵を以て  
盤石に当るが如き彼れが強兵。我詞を用ひざれば是  
非に及ばぬ。我は一個の意を決せん。

洪 ヤア、我軍の先きをくじぎ、日本軍を賞賛する参謀  
が憎付くき言葉。彼れに構わず砲発致せ。

皆々 パアく。

ト是にて甲板の下より大砲を発する体にて、  
多く烟りを焚き、大砲の音をさせる。甲板  
より士官指揮して兵卒に鉄砲を打たせる。  
此内、後ろ日本艦よりも砲発する体にて船  
体はゆれる事。始終大砲鉄砲の音にて此時  
上手より。

豊島 進め ○

ト号令を掛け、是を浪の音、喇叭の音に成  
り、上手より日本旗章を建てし白塗り端艇  
に、白の服帽子の水夫二人權を漕ぎ、此船  
の舳先に豊島大尉、海軍士官帽子の形りに  
て日章の旗を振り、指揮して白服帽子の水  
兵四人は鉄砲を支那軍艦に打ち乍出て来る  
を、支那艦よりも是に砲発する。是にて後  
ろと前にて南京花火の音、大砲の音烈しく  
成り。

それ乗り移れ ○

ト支那艦の傍へ来り、端艇より手早く鎖り  
を掛け、梯子を引懸る。豊島は指揮旗を胸  
にさし、剣を抜き支那艦の甲板に乗り移  
る。水兵も鉄砲を持、続いて乗り移り、是  
より甲板の上にて豊島は支那兵を相手に立  
廻り有て、剣にて切り倒し、又は海へ切り  
込むなど色々面白きごつちやの立廻り有て、  
洪偕元其他士官は舳先の方へ切りまくられ、  
逃る。此時趙正珪は白旗を持来り、豊島の

前に建る。豊島見て。

留れ。

ト号令掛る。水兵四人は鉄砲を突き、上手に控へる。支那軍皆々下手に居並ぶ。豊島こなしあつて。

降表を出したる其方は。

趙 清国軍艦功落号の参謀趙正珩と申者。

豊 シテ、当艦の司令官は。

趙 洪偕元と申者。

豊 乗込の員数は。

趙 将校以下、下士卒合せて百五十人。

豊 シテ、当艦は我日本軍艦に対し、何等の趣意にて亡

状にも砲発を始めしや。

趙 当艦は北洋艦にして西隠号と共に牙山湾に碇泊せし

所、今日本国太沽より陸卒一千五百人、搭送号に搭

載なし、東障号が保護致し牙山に運搬するを見て、

航海の無事を守らん為、西隠号と共に迎ひに出たり。

然る所、途中恰かも貴国軍艦に出逢ひしゆへ、時勢

柄我艦内不穩の挙動あるにより、予は甚だ是を愁ひ、

理を尽して制すれども省せず、終に無謀の所業に及

び、当艦より砲撃を始めし故に我軍の力と頼む三艦は今一刹那にして敗を取れり。是全く我艦の軽率より起りし事。千悔万悟是に過ぎず。

豊 実に其方の申事然り。我軍敢て戦鬪を好まず。当艦

より砲発を始めたる故、他の三隻均しく我れに砲撃

せしも瞬間にして、西隠号は船体を打破られ、から

くも支那に逃走して運兵船は沈没なし、東障号は降

参せり。是以て無抛義なり。

趙 如何にも。此上は我降表を容れられ東障号同様、無

事ならんを願ふものなり。

豊 然らば予は本艦に帰り、司令長官の訓令を受けん。

趙 能き計らひ下されたし。

豊 暫時此俟相待たれよ。

趙 貴命に随ひ申べし。

豊 それ。

ト是にて豊島、水兵は元の端艇に移り、浪の音にて上手へ漕では入る。此内洪偕元、

陳朴平、晋退局皆々下手に控へ居て、互ひ

に顔を見合せ、ツカ／＼と前へ出て、趙正

珩を取巻き。

洪 如何に参謀。汝、司令官の指揮を受けずして、なぜ降表の旗を出せしぞ。

趙 コハ情けなき疑問かな。先に拙者が詞を背き、砲発を始めし故、味方の三艦一声に砲撃の致せし為、僅の間に三艦共或は逃走、沈没と大失敗を取る上に、残るは功落一隻にて、日軍は前後より烈敷く射撃致す計りか、剩さへ乗込まれ進退尽て、某が降表を出せしは将官を始めとして当艦内一同の命を助けん我信実。

洪 ヤア、降参などゝは穢らわしく。たとへ総軍悉く彼れが為に打沈められ、溺死なすとも。

陳・晋 降るべきや。

趙 左程の決心あるものなれば、今日日本軍が僅かにて当艦へ切り込みし時、なぜ彼等をば討取らざりしぞ。

皆々 ヤ。

趙 見苦ししくも切りまくられ、既に危くなりしならずや。サア、斯く成る上は尋常に彼れが命に随ふより外に手立は少しもない。

洪 イヤ彼れの命を待たんより、油断に乗じて此方より死に物狂ひに打て出て、再び勝敗を決すべし。

趙 いかに礼義を乱せばとて、先の手並にこりもせず、約を變する愚かの至り。其義は決して相成らぬ。

洪 ヤア、妨げ致すな趙正珩。それ、こやつから討て取れ。皆々 パアく。

ト皆々趙正珩に打て懸る。趙正珩、兵卒の鉄砲を引たくり、是にて大勢と一寸立廻り有て、ト、叶わぬこなしにて浪布の中へ飛込。洪偕元見て。

洪 それ砲撃致せ。

皆々 パアく。

ト日本艦の方と浪に泳ぎ居る趙正珩と双方へ鉄砲を打込む。是にて烟りを焚き、又鉄砲大砲の音に成り、此時後ろ日本艦より大砲を打、功落号の艦に当りし体にて花火と烟りを沢山に焚き、此とたん功落号は艦の方打碎けて、段々に沈む。甲板の上の人数は士官、兵卒思ひくゝに浪布に飛込み、又は砲撃に逢ふものなどあつて、ワアくと泣き叫ぶ。此模様宜しく大砲の音、喇叭、浪の音にて、此道具浅黄幕を冠せる。

本舞台一面の浪幕。右の鳴物にて道具納る。

ト上手より浪幕の外を泳ぎ、功落号より飛込みし支那兵、ワアくと泣きながら大勢出て来る。此時橋懸りより日本の旗章を建てし端艇に水兵四人、劍鉄砲を持、水夫二人、櫂を押し切り漕ぎ出て来り。

水兵 功落号より海中に。

□ 飛入たる支那軍兵。

△ 生捕れとある命令なれば。

× 見附次第に。

皆々 捕縛なさん。

トいひ乍上手へ漕ぎ来る。支那兵是を見て。

支那兵皆々 ハア、ハア、ハア、ハア、日本軍だ、それ逃る。

ト皆々逃げよふとするを。

○ ヤア、死にぞこなひの清国兵。

□ 浪に漂ひ、何れへか。

△ 上陸せんとす迎も。

× 日本軍の目に懸らば。

水夫⊕ いかで其俣ゆるすべき。

水夫× ふんじばつて。

皆々 引立ん。

支那皆々 ワア、

ト逃げまどふを水兵是をとらへんとする。支那兵は浮沈みして上手へは入るを、水兵は端艇にて是を追ふては入り、又支那兵逃て出るを端艇追ふて出て、宜敷浪の中の追欠あつて、ト、橋懸りへ追ふては入る。跡浪の音にて浪幕を切て落す。

本舞台向ふ一面浪の打抜き大遠見。日覆より霞をおろし、都て豊島沖海原の体。此模様よろしく浪の音烈しく、喇叭の音にて道具納る。

ト直ぐ上手より以前の支那士官陳朴平、晋退局其外兵大勢、板子を持って泳ぎ出て来るを、上手より以前の端艇にて豊島大尉、水兵、水夫漕ぎ出て来る。下手より水兵計りの端艇、矢張支那兵を追ひ出て来り。

豊島 それ、漂流者を救ひあげい。

水兵皆々 ハツ。

ト皆々是を救ひあげんとする。此内支那士官は殺されるのかと思ひ、逃げ泳ぐ。水兵は追廻し、支那兵の弁髪を持、船へ引上る。豊島思入有て。

支那軍 忝ひ。

豊 我軍大勝利を得たる上は、イザ本艦に引上ん ○総隊凱旋。

ト号令を懸る。是を一声、内にも。

皆々 日本万歳。

豊 海軍万歳。

皆々 日本軍隊万歳。

ト三唱する。

豊 ヲ、○

ト指揮旗を振り上るを木の頭。

勇めく。

ト皆々鉄砲を立て悦ぶこなし。豊島は指揮をする。後ろにて祝砲の音して、此模様よろしく浪の音、海軍の奏樂にて

ひやうし幕

著作 勝諺蔵

## 四幕目

日本大勝利

四幕目 清国天津総理衙門<sup>(マツ)</sup>の場

四幕目

清国天津総理衙門の場

役人

- 一 総督李鴻章
- 一 前公使袁世凱
- 一 総管内相福錕
- 一 弾劾委員張之洞
- 一 同 翁同龢
- 一 同 張之万
- 一 同 李鴻操
- 一 注進鄭士尺
- 一 館員夏伝道
- 一 官人 四人

## 清国天津総理衙門の場

本舞台平舞台。正面大瓦燈口。是に紙帳を

左右に絞り、此向ふ幾間も見たる筋り付。

上下折廻りの塗り壁。前側矢張り紙帳をか  
けし瓦燈口。大欄間をおろし、舞台面に花

氈を敷き、都て天津総理衙門応接間の体。

爰に上下能き所に上等の支那の椅子六脚置

き、左右に官人四人、皆支那服にて椅子に

かゝり居る。此模様宜敷唐楽にて幕明く。

○ いづれも方、今日、当総理衙門へ北京政府より突然

に四人の上官お越しに成りしは、何等の儀でムらふ  
な。

□ さればでムる。其四名の上官方は、張之洞、張之万、

翁同龢、李鴻操氏等にして、是迄其名聞及べども。

△ 終に一度も当衙門へお越しに成りし事を覚へず。今

奥にて総督たる李鴻章君と談語の最中。

× 公廨の事は我々が耳にする事ならね共、其対顔の様

子を見るに、何とやら双方に穩やかならぬ体に見ゆ  
る。

○ 某が察する所は、矢張り朝鮮出兵に付ての義と思わ

るゝが、何にしても当節柄。

□ 四名連れにて北京より俄かに出張ありしといふも意味深長のある事ならんが、兎角国には。

皆々 事なかれでゐるて。

ト此時向ふ戸家の内にて。

袁世凱 イヤく、別段取次には及ばぬ。直ちに拝顔致す  
有ふわへ。

トいひ乍唐樂にて向ふより前幕の袁世凱、手革鞆と帽子を持先に、跡より夏伝道、支

那服官人にて付き添ひ出て来り、花道にて。

夏伝道 袁公使には海上御無難にて御帰国、先は大慶に存ずる。

袁 イヤモウ無難やら危難やら。何は扱置き、今門外に有りし四輛の馬車は何人の入来なるぞ。

夏 あれは只今北京より張之洞、張之万、翁同龢、李鴻操の四氏、何事か要用のムつて、李総督に面会の為御出張に成つてゐる。

袁 スリヤあの四名が。ハテナ ○何は然れ、片時も早く総督の拝顔を得ん。

夏 サア、お越し被成れ升せ。

ト右の鳴物にて舞台へ来る。四人見て。

○ 是はく、朝鮮駐在の袁公使には俄かの御帰国。併し御健勝にて。

四人 大慶に存じ升る。

ト此内袁世凱、椅子に懸り。

袁 ヲ、其方共にもいづれも無事にて満足く ○シテ、承れば北京より入来人のある由なるが、李総督には今お相手か。

□ いかにも只今奥にてお咄し中に。

四人 ムり升る。

ト此時奥にて。

李鴻章 イヤ、知らずに及ばぬ。それへ出て面会せん。

夏 アノお声は。皆々 総督。

ト是を唐樂に成り、官人は李鴻章の椅子を上座に直す。此時奥より李鴻章、立派なる官服の形りにて出て来る。皆々椅子を立て

敬礼のこなし。李鴻章、椅子に懸り。

李 ヲ、世凱には只今帰国致したか。  
袁 ハツ ○総督にはお麗わしき御尊顔を拝し、世凱大

慶に存じ奉る。

李 其方にも長らくの駐在、種々繁雜なる事務上に勞れも出ず、先は重畳 ○ コリヤ其方共には奥に参り、入來人のもてなし致せ。

四人 ハツ、畏つてムリ升る。

夏 然らば拙者はお表へ。

李 ヲ、行けく。

皆々 ハツ。

ト四人は奥へ、夏伝道は向ふへは入る。跡

李鴻章、袁世凱残り。

袁 シテ、北京より出張の。

李 いかにも内官四名來りしなれ共、いまだ何等の趣意を聞かざれ共、予は推測の致し居る。それは扱置き、朝鮮国の事件に付き其方よりの上申書にて粗了知致し居るが、シテ其件の挙動はいかに。

袁 さればお聞下さり升せ ○ 予て度々紙面を以て上申の致せし如く、近來韓王、日本の仁義を深く重んじて、我清国に隔心の生ぜし挙動の見へしゆへ、韓廷第一の権力者閔泳駿を手なづけて、我目的を達せんと思ふ折柄、恰かもよし全羅、忠清二道にて東学党

の蜂起せしより、閔族と相謀り、朝鮮の兵力にて鎮圧する事成り難し。依て清国より出兵を乞わせし所六月六日に至り、我兵牙山に到着したり。然るに日本公使は同月十日、海陸の兵を率ひて入京なし、以後陸兵は京城にとゞまるのみならずして、各要所に屯營せり。實に日本出兵の速かなるに驚きたり。故に計略も自由を得ず、韓廷よりは東学党の静穩に傾きたれば、我兵撤回の請求を受け、各国の公使よりは猥りに援兵派遣せしとて、異議を唱へ、日本は内政改革を促したるに依り、元より国王日本の実意を感じ玉ふものから、改革決行せられんとするに驚き、国王を奪ひ去らんと計りしも、其事を果さずして、結句日本の兵をば撤回さしめざれば、納りがつき難く、依て閔族をはじめ其他我党の勢力者を説得して、一時改革に傾きし廷議をば覆へし、公文をもつて日本兵の撤回を公使へ申込ませしも、皆泳駿が計らひなり。而して密かに某は日本公使に面會して胸中を探り見たるに、我兵撤去せざる内は日本も引かずと断言されて、某も是では所詮と無断にて逃げて ○ イヤサ、無断に帰国致せしも閔泳駿ある以上は改革

案の功も立ず、又某が居らざれば我兵の撤回を申込むべき所もなく、彼是思慮を廻らして帰国致してムり升る。

李 何さま閱泳駿立つ以上は、韓廷の政權は彼れ次第なれば、改革の儀は成り難し。又、我兵撤去の事も其方引揚げし上は相手なき喧嘩は出来まじ。併し、万に一つ韓廷一変して牙山の我兵撤去の儀申入れんも、其方がおらざる時は直々に彼れ兵力を以て撤回を促がさん事をおもんばかり、則ち過日太沽より一千五百の陸兵を運送船に搭載なさしめ、牙山応接の其為に出発させたる事なれば我軍には十分の備へを設けあるからは、何恐るゝ事あらん。

袁 スリヤアノ牙山の陣營へ陸兵増加せられしとか。夫ぞ我兵磐石。流石は総督の御賢慮、恐れく。かく迄も堅固に我兵の動ずる気色あらざれば、日本兵も退屈せん。ハテ愉快極まる義でムり升る。

ト是をバタ／＼に成り、向ふより鄭士尺、支那服軽き拵らへにて走り出て来り、花道にて拱手して。

鄭士尺 ハツ、総督閣下へ一大事の御注進。

ト李鴻章見て。

李 何、一大事とは。

袁 誠に其方は某帰国の節、密意を含め京城に残し置たる鄭士尺。一大事とは、心元なし。早々はへ。

鄭 ハツ、御免。

トツカ／＼と本舞台へ来り、下手に住居。李鴻章、思入有て。

李 シテ注進の仔細は如何に。

鄭 ハツ。拙者、袁公使の内意に随ひ京城にとゞまつて密かに忍びおつたる所、元より韓王、閔族が専横を憎み玉ひ、親ら御英断遊ばされ、日本の勧告を容れられしに付、去ル廿三日の朝、日本公使は兵を率ひ、大院君の護衛して王城に参内あると、閔氏聞くより打驚き、参内させては一大事と、自分の兵を繰り出し、途中に於て喰止めんと、閔氏砲撃致せ共、日本兵に敵し難く、終には死傷をかふむりて散々に打破られ、軍器を捨て敗走せし故、大君、公使は無事に参内。閔族逃走行方知れず。

ト此内、李鴻章、袁世凱聞度毎に驚きしこなし有て。

李 ヤ、、、スリヤ韓廷には日本の勸告を容られて太君参内ある計りか。

袁 味方と頼む泳駿が目的を達せずして逃走せしか。アノ、逃走。ヤ、、、。

鄭 まだ夫計りの事ではムらぬ。拙者其後、韓廷の模様如何んと伺ふ所、速かに内政改革に着手なし、猶閔族を見附次第捕縛なして流刑に所するとある嚴命なれば、此趣きを早速に帰国なして上申せんと、廿四日に出立なし、廿五日に仁川より使船に乗ずる折柄、豊嶋沖にて我軍艦、日本艦と衝突<sup>シヤウ</sup>なし、一大海戦始まれり。

袁 ヤ、、、スリヤアノ、豊嶋沖に於て。

李 シテく勝敗如何なりしぞ。早く申せ。

ト急度いふ。

鄭 日本軍艦三隻にて航海中の其所へ、我軍牙山に差向ける陸兵一千五百人搭載なしたる運送船。是を保護<sup>クマ</sup>なし軍艦は東障号にして、是を迎へん其為に牙山の方より来りしは、西隱、広乙二艦にして、都合四隻と日本三隻。双方ためらふ其内に、我軍艦より日本艦へ砲撃なしたる夫故に、彼れも透さず砲発して、

陸兵船を打沈め、東障号は降参なし、西隱号は船体を貫かれて敗走せり。残る一隻広乙号、一旦降表掲げながら、再び砲撃致せし故、船体微塵に打砕かれ、是も沈没同様の姿と成りし味方の大敗。一大事の注進、如此にムリ升る。

ト此内李鴻章、無念のこなしあつて。

李 チエ、口惜しき其敗報。一千五百の陸兵は、予が撰みし練軍にて、尤も一騎当千の精兵をば失ふ計りか、北洋艦の其内にもいづれも堅牢無双たる鋼鉄艦を、或は沈没、或は打たれ、剩さへ降参して敵の為に捕拿されしは返すくも我軍の不幸の極といふべきか。京城の変といひ、斯く迄事の齟齬<sup>ソコ</sup>なすは、予が武運の尽きたりしか。思へば無念、口惜しい。

トよろしくこなし。

袁 その御無念、御尤にはムリ升れど、僅か一千五百の陸兵。まつた軍艦の三隻、四隻失へばとて、差支へなき我勢力。勝敗は軍事の常。朝鮮の変動も、まつ其如く。只此上は聡明なる御計略こそ願わしう存じ奉る。

李 其方が申迄もなく、予は軍隊軍艦を惜むにはあらざ

れ共、再度の不覚、如何にも残念○何は然れ、鄭士尺とやらに休息させい。

袁 ハツ○鄭士尺には遠路の注進〔大儀〕で有た。次へ下つて休息せよ。

鄭 ハツ、忝ふり升る。

李 去り乍、只今注進の一条は必らず口外無用なるぞ。

鄭 ハツ、委細承知仕る。

李 サ、行けく。

鄭 御免被下れ升ふ。

ト鄭士尺は橋懸りへは入る。李鴻章思入あつて。

李 只今彼に申付し如く、我不覚を取りし事件は、飽迄も隠蔽して決して他言相成らぬぞ。

袁 スリヤ、北京政府へも。

李 如何にも。

ト此以前、奥より張之洞、翁同龢、張之万、李鴻操の四人、支那上官の服装にて出懸り、始終を聞きしこなし有て。

張之洞 アイヤ、其事態を隠蔽召るは。

翁同龢 甚だもつて。

四人 無益の至り。

トいひ乍、四人前へ出て、椅子に懸る。李

鴻章見て。

李 スリヤ、各々方には注進の。

袁 一部始終を。

張之万 アイヤ、只今の注進にて始めて知りし義にあらず。北京政府は疾くよりも此敗報を聞くと均しく、陛下の逆鱗甚だしく。

翁 則ち我々四名の者、弾劾委員を命ぜられ、今日出張。

四人 致したり。

李 スリヤ、夫故に打揃ふて。

張之万 いかにも今承れば、彼の二件の失策を北京迄も隠蔽せんとは。

李鴻操 貴殿の心中、甚だいぶかし。是には何ぞ所存有ての。

四人 義でゐるか。

李 いかにも容易ならざる此度の事件。諸事秘密を要するが故なり。

張之洞 兎角貴殿は秘密く、と、此度の朝鮮出兵の事を始め、失礼ながら得意顔に。

翁 貴殿一己の所存をもつて、ほしい俛に万事万端取り計らひ召るゝゆへ、既に此度朝鮮の政略戦略二つながら、其よろしきをを得ざるなり。

張之万 是に依て、そこ元の御身にいか成るお咎めの。李鴻操 かゝらんも計られず。お覚悟召され。

四人 李鴻章どの。

李 コハ聞苦しき各々の詞。不肖の中堂、忝くも陛下の特命蒙りて、上海以北の軍隊を総督なす指揮官たり。然れば兵事一切の事は李中堂が権内にあり。何私の計らひならんや。

袁 殊に朝鮮政略の義も、閔泳駿と某が堅く誓紙を取り交したるに、帰国の後に一変して密約面餅に属せしは、是全く我が志望を達する期に至らずして、我誤りとも申されまし。

張之洞 だまれ、世凱。汝、朝鮮駐在官の重任を忘れ、韓廷は元より、各国の使臣へも無断にて逃げ帰り氏は、我清国の体面を辱しむる者ならずや。

袁 イヤ、某決して逃げては帰らず。病中ながらも秘密の義を李総督へ上申せんと、密かに帰国致せし某。翁同龢 とぼけな、世凱。其方迄が秘密くくと、其秘密

の上申も、今と成つては要をなすまじ。先第一の失策は、本年は西太后の寿宴の御祝年に当れり。

張之万 其年に兵を動かし、治安を紊乱すは不吉の恐れなきにあらず。高の知れざる東学党の乱。韓廷すら念頭にも掛けざりしを。

李鴻操 袁世凱にはことごとくしく言ひなして、閔泳駿と相謀り、我国へ援兵を依頼させしといふ事は、我く予て聞伝へたり。

張之万 かるが故に、日本より兵を派遣したるは、元吾国より出兵せしに依れり。夫といふも、天津条約に基けるものにして、我国兵を派しざれば、何ぞ日本兵を出さんや。夫よりして事起李、牙山の援兵請求の返答に差迫り、公使は退国。其後にて韓廷は一変して我国の秘密手段をあばかれし剩さへ、四隻の軍艦、軍隊共にうしなふ程の国の大事を北京政府へ秘せんとは、是に過ぎたる。

四人 決断なし。

李 尤も其義は政府へも疾く聞へしのみならず、先刻の注進にて始めて知つたる事実なれ共、いわばさゝいな事なるに、君を驚かし奉るは恐れあり。殊に御祝

年、御誕辰の当日前後は国務さへ打捨て上下慶し奉る習ひ。且、某が考へには、再度び我軍を起し日本勢を打破り、最初の不覚を挽回して、結局奏聞致さんと、彼是思慮を廻らして、一時隱蔽なさんとせしは、上を憚り遠慮せしなり。

袁

いかさま閣下の仰せ御尤も。さゝいなる義に狼狽なすは甚だもつて見苦しく、元より日本小国なり、我恥辱を雪がん事、何よりもいと安し。たとへ日本全の臣民、ふるつて我国に敵たわんとなすとても、我中華は大國なり。其上ならず、李中堂には強兵五十万を募集なし、曾て劉銘伝を総督に、劉永福を副総督となし、既に軍備整ひしと承りおる事なれば、恨み晴らすは造作もない事。

張之洞 ヤア、汝口から出任せの空言も大抵にせよ。我

も軍議大臣なれ共、去る會議いまだ聞ず。殊に劉銘伝は日頃より不平を抱き、李鴻章どの、招きにかで応ずべきや。劉永福とて其如く、我国人口四億万なるといふ名のみにて、政令元より一統せず。功ある者も必らず賞せず、罰ある者も必らず罰せず。官吏おのが心の俣に賄賂の多少に依て賞罰を行ふゆ

へ、国民、政府の苛政に苦しみ、常に恨み奉るがゆへ、義勇兵を募るといへども是に応ずる者、更になし。

翁同龢 それに何ぞや強兵五十万を募るなど、は、出ほ

うだいの程のある事。李鴻章どの始め、汝にも我国の敗報を聞きしは只今の事にして、国辱回復の軍議せしいとまあらんや。よしや此後何億万の兵あるとも、我国の如く、兵制紊乱して不規律、不教育の兵を以て、嚴制たる日本兵に打勝たん事、思ひも寄らず。殊に彼れは条約を格守して朝鮮の独立を保全せんとす、真の義勇兵なり。我は条約を破り、妨害なさんとする暴兵なり。

張之洞 彼れは合戦の名義正しく、文明の利器を以て戦

ふものなれば、所詮我れの及ぶべき。殊に近頃我国は財政困難にて、其上国内の事情を見よ。彼の馬賊の輩爪を研ぎ、牙を磨きて起たんとす。まつた明の遺臣は三百年來の恨みをば、晴さんものと伺へり。李鴻章 故に君をはじめ我々に於ても、平和の説を取りしは、国力疲弊なれば、いか成る英勇豪傑も手を下さ道なし。然るに李鴻章どののは主戦論を主張なし、案の如く豊嶋の一戦に敗を取れり。

張之洞 今にもあれ、牙山の兵引続いて敗北なし、猶軍艦を失ふに至らば。

翁同龢 貴殿何と言訳仕召るぞ。到底死をもつて其罪を謝する外は。

四人 ムるまい。

李 ヤア、我国の愁ひを望む不吉の詞。我は坊戦をもつて目的となせば、尔後海軍は渤海湾口を中央として、太沽、旅順、鴨綠江近海に全力を集め、又陸軍は沿海各地に分遣なし、敵軍の侵撃を防ぎ、而して此方より大軍を以て攻撃なし、若又大敗を招く共、其責任は夫々の総督等に歸する者なれば、予は一向心頭にかげず。只我持口さへ嚴重にして、一度び勝利得し程なれば、何ぞ死を以て謝するに至らんや。

ト四人顔見合せ、あきれる思入。

張之洞 何さま、自分一己の武備を維持して、支那全国の勝敗は心頭に掛けられぬは、今更怪しむに足らぬ共。

翁同龢 斯る頼母しき仁に兵馬の大権をゆだね玉ひし御聖運の。

張之洞 末を思へば実以て。

李鴻章 歎かわしき義には。  
四人 ムらぬか。

袁 ヤア、又しても中堂閣下へ無礼極まる各々の詞。左いふ張之洞どのなどは、何ぞや長髪賊討伐の當時を思わば、李中堂閣下に対して戦政を彼是難じらるゝ義理でもムるまい。袁世凱片腹痛くぞんじ申。

張之洞 ヤア、我に向て失敬な詞。

翁同龢 殊に勅命に依て下りし我く。

張之洞 無礼あらば。

四人 ゆるさぬぞ。

李 アイヤ、いづれも控へられよ。あなたがち袁世凱の詞も理なきに非ず。愛国心のなき者、豈軍国の事を知らんや。ム、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ。

ト此時向ふより、以前の夏伝道出て来り、

花道にて。

夏伝道 ハツ、只今北京より勅使として総督内務府大臣福錕氏、御入来にムり升る。

李 ナニ、勅使。

皆々 御入来とな。

李 何は然れ、御案内申せ。

夏 ハツ。

ト引返しては入る。李鴻章思入。

李 それ旁く、お出迎ひの致せ。

ト奥にて。

四人 ハア。

ト奥より以前の官人四人出て来り、真中に

椅子を直して、四人共花道迄行き、出迎ふ

こなし。是を唐樂に成り、向ふより福鋸上宮、

支那服にて、跡より夏伝道付添、出て来り。

夏 お勅使には先づ。

四人 お席へ。

福鋸 ヲ。

ト右の鳴物にて本舞台へ来り、福鋸真中の

椅子に掛る。皆々宜敷く礼有て、官人は左

右に控へる。張之洞思入有て。

張之洞 コハ思ひ寄らざる総督内相。

翁同龢 お役目御苦勞に。

皆々 存じ升る。

李 シテ勅使に立れし福鋸殿、勅諭の趣きは。

袁 何事に亙るや。時節、袁世凱甚だもつて心元なし。

張之万 我くにも謹んで。

四人 勅の趣き承り度し。

福 皇帝の勅諭、余の義にあらず。李鴻章の罪を責め、

黄環袍褌奪せよとの勅命を蒙り、斯く下向致したり。

李 コハ安からぬ勅命を承るものかな。李鴻章何罪あつ

て、皇帝我黄環袍褌奪なし玉ふや。

福 罪なしとはいわれまじ。今回の事件、今更申迄もな

く、本年は西太后六十年の祝賀にして、清国誠に目

出度き年なれば、外国と戦争致すなぞは、尤も忌む

所なり。然るに袁世凱、まつた閔泳駿などの無謀を

容れ、おのが軍務総督の任にあるを以て、ほしい俣

に兵を出し、政略戦略二つながら大失策を致せし事、

疾く叡聞に達せし故、以ての外の逆鱗。爰に於て彈

劾委員を派せし後、廟議を開き、李鴻章は自己の專

横にて支那国体を辱しむる者にして、其罪尤も輕か

らず。依て速かに黄環袍褌奪せよとの勅命あり。

ト急度いふ。李鴻章じつとつ向く。袁世

凱胸をさすり思入あつて。

袁 我が身の上と思ひしに、左はなくして先づは安心。

福 ヤア、汝とても罪は逃れず。

袁 とは又何ゆへ。

福 李鴻章をして大事を誤らせし其根本は、汝にあり。

袁 ヤ。

福 取逃さぬやうお連れ下され。

張之洞 仰せにや及ぶべき。

翁同龢 袁世凱

四人 同道せよ。

李 スリヤ、袁世凱を。

袁 北京政府へ。

福 かゝる不覚者の為に国を誤まり、終に逆鱗にふれ、

其身の名誉とせられたる、黄環袍を褫奪せられし李鴻章殿の末路、御気の毒なれ。

張之洞 猶も此上牙山の陸兵、日本軍の其為に。

翁同龢 又も敗北なすならば、今度は又。

四人 孔雀帽。

福 御用心あれ、李鴻章どの。

李 実に此度の事件に付ては、只虚喝して威を示さば、

日本必らず戦ふまじと思ひしに。

袁 案に相違の日本の勢ひ。

張之洞 其過矢より清国は、外には日本の大敵あり。

翁同龢 内には馬賊、歌老会。

張之万 明末諸豪の内患あり。

李鴻操 実に清国の運命は。

福 恰も孤燈が一陣の風を待つに異ならず。

張之洞 是皆世凱、李鴻章どの。

翁同龢 失策より斯く。

五人 成り果たり。

李 今更いふも愚痴ながら。

袁 中堂閣下。

ト兩人顔を見合背、李鴻章帽子を取て天窓

を叩くを木の頭。

李 あやまてりく。

ト後悔のこなし。皆々思入よろしく、唐樂

にて

ひやうし幕

著作 勝彦蔵

五幕目

日本大勝利

五幕目 素砂場露宮軍議の場

安城渡シ橋梁切断の場

集団家屋夜戦争の場

同勝崎大尉討死の場

五幕目

素砂場露宮軍議の場

安城渡橋梁切断の場

集団家屋夜戦争の場

同勝崎大尉討死の場

役人替名

一 勝崎大尉

一 倭少尉

一 国野騎兵

一 支那軍士官閔乱敬

一 同 斥候陳唐林

一 渡辺大尉

一 広木少尉

一 石島少佐

一 富士島中佐

一 瀧田中佐

一 大城少将

一 日軍喇叭卒 二人

一 同 砲兵 二人

一 同 歩兵 十六人

一 支那軍兵 大勢

一 同 斥候兵 二人

一 同 抜刀兵 十人

一 騎兵乗馬 一頭

素砂場露宮軍議の場

本舞台平舞台見附幕帛を建て、是にズツクの幕を張り、左右折廻り。上下岩山の出しかけ。此前、松の立樹。日覆より同じく釣枝。都て朝鮮国素砂場日軍陣の体。所々に篝火を焚き、真中に荒木にて作りしターブルに地図を開き置き、爰に正面に聯隊旗を建

大城旅団長、此上手に富士嶋中佐、下手に

石崎少佐。此前上手に瀧田中佐、渡辺大尉、

広木少尉。下手に勝崎大尉、倭少尉。いづ

れも陸軍士官、帽服装にてサーベルを帯び、

置<sub>ニ</sub>椅子に腰を掛けて地図を見て居る。上手

に喇叭卒二人、ラツパをかい込み、砲兵二

人長きサーベルを帯び、車に乗せし大砲を

守り、歩兵六人ランドセルを背負ひ、劍鉄

砲を持。下手も矢張り歩兵十人いづれも白

の服帽子にて、整列して居る。此模様よろ

しく山おろし、喇叭の音にて幕明く。

大城 各将校の方々、弥今宵、夜を犯して牙山の支那兵

攻撃と決定の致してゐるぞ。

富士嶋 故にいづれも攻撃の。

石崎 進路の方向。

兩人 議せられよ。

勝崎 実に渡韓以来空然と龍山の陣營にて月を閲すると

いゝ久しく只々肉の肥るを歎き、いづれも刀劍幾度

か既に鞘を脱せんとしては、いまだ脱せざるを恨み

とせり。

〔脱巻〕

故に日夜兵士の心に怠慢の生ぜん事を恐れり。然る

に当月廿五日、龍山なる營中にて進発の命出ると均

しく、士氣已に挽回して焼が如き炎天の下を凌いで

出発なし。

倭 五日間を費やして当素砂場に陣を敷き、今日即ち廿

九日。

渡辺 弥く以て爽かに我軍隊の鬱気をば。

広木 晴らす時機に達せしは。

勝・瀧 誠に愉快な。

皆々 義でムり升る。

大 予も総軍の勇氣を見て益々心満足せり。殊に韓民共

のいふ所を聞いて見れば、一昨廿七日迄は支那軍の斥

候兵、此地に徘徊致せしなれ共、我軍の龍山を進発

せしと聞よりも、皆引上しと有るからは、清国の軍

隊はいよゝゝ間近にあると思へり。

勝 旅団長の仰せの如く、我軍進発せざる迄は水原、振

威の辺りまで烈しく往來致せし由。就而は今日平沢

を経て牙山方位に向ひたる我斥候の報せには、支那

軍隊は悉く牙山の根拠を打明て東行せしとの事であ

り升。

瀧 今勝崎君のいはるゝ如く、此瀧田が敵の備へに觀察

を下す時は、即ち牙山の咽喉たる成歎駅に悉く進み  
出しと思わるゝ。

勝 依て今宵成歎に集合したる総軍は、渡韓なしたる清  
兵の。

瀧 全体なりと。

勝・瀧 見受らるゝ

富士 いかにも御両君のお説の通り、其支那軍の員数も、  
京城にての噂サには、五千人とも称すれど。

石 或は土着の民より聞けば、三千人とも申合へり。

倭 何れも是非は分らざれども、たとへ幾万防禦なす共、

渡 高の知れたる支那軍隊。何程の事やあらん。

広 シテ、隊伍の手配り、攻撃の。

皆々 進路はいかに。

大 編隊を二軍に分ち、右翼軍を枝隊となし、左翼軍を

本隊として、右翼の長は瀧田中佐、勝崎、渡辺両大

尉、倭少尉是に当り。

富士 左翼は則ち旅団長大城少将是を牽ヒキひ、此富士崎を

はじめとして、石嶋少佐、広木少尉。

石 進路は則ち当所より成歎迄は三筋あり。其真中は本

道にて、忠清道の往還なり。

富士 又、間道の二筋は、一方は高地にして、一方は凶  
の如く平沢県への近道にて、此通行難義なり。

石 我輩が思ふ所は、右翼枝隊は本道より、左翼は高地  
を迂回して進撃せんはいかに。

ト地図を示していふ。

瀧 成程、其義尤もなれ共、寡を以て衆に当るは、敵の

虚を討たずんば勝利得難し。今地図を閲するに、当  
素砂場より平沢に横きる道は、狹隘にして水田或は

沢沼の間を僅かに通ずれば、兵数兵器馬匹をば引て

進行せん事は到底自由に成り難し。此難道を我枝隊

は皆歩行立にて不意に進み、安城渡に出んは如何に。

勝 枝隊長のいわるゝ処、我輩甚だ賛成致す。尤も枝隊

は歩兵なれば、たとへいか程難道たりとも、無事に

越さんはいと易し。殊に右翼は敵軍をおびき出す目

的にて、左翼は成歎東北なる高地に達し、大砲にて

側面より発射なし、左右均しく敵軍を挟み撃は容易

なり。

ト是にて皆々感じ入たるこなしあつて。

大 流石は瀧田、勝崎の両氏。勇壯活潑なる其意見、予

が思ふ凶に当れり。然らば本道を除き、上下二線の  
間道より進撃と決すべし。

富士 何さま、それも至極の。

富士・石 奸計。

倭 シテ、枝隊長のお手配りは。

瀧 前衛枝隊と本隊と、隊を距離して進行なさん。

勝 其前衛は此勝崎。倭少尉の小隊は、我先鋒の尖兵に

て、進撃するを要すべし。

倭 スリヤ、尖兵を我軍に。委細承知仕る。

広 我輩は左翼より砲兵を引て進まん。

渡 又此方は右翼枝隊の前頭を相勤めん。

ト此内皆々時計を出して見て。

大 左右手配り定むる上は、最早一時に。

皆々 間もあるまじ。

勝 此上は斥候の報を聞て。

皆々 進発なさん。

ト是を喇叭の音、バタ／＼に成り、向ふよ

り国野忠蔵、騎兵の帽子服にて抜剣を持

馬乗にて走り出て来り、花道にて。

国野 ハツ、清軍の模様、早速報告仕らん。

ト皆々見て。

大 ヲ、待兼おつた。

皆々 早く／＼。

国 ハツ。

ト舞台へ来り、下手にて馬より下りて真中

へ来る。勝崎こなし有て。

勝 シテ、見届けたる敵の挙動は。

皆々 いかゞ成るぞ。

国 ハツ、今宵本隊の命を奉じ、本道より上下の間道、

馬を馳せて探検せしに、両間道には支那軍は一人も

居らざれども、只本道の直線たる成歓駅の手前なる

安城渡の南岸に、要路を塞ぎ陣すれ共、夫から先は

悉く敵の接息する土地なれば、踏み込む事は成り難

し。

大 シテ、安城渡の南岸に備へし敵の。

皆々 員数は。

国 其数凡五百人。されども敵はゆる／＼と篝火さへも

絶へ／＼にて、皆睡眠の陣にして、急に防禦の挙動

も見へず。今我軍が進撃をば、夢にも知らざるものゝ

如し。

ト勝崎思入有て。

勝 ヲ、能くも見届け参つたり。併し敵軍も油断の体に

見せかけて相手を間近く引寄せん手立かも計られね

ば、却て我軍油断して、不覚を取らば一大事。

瀧 いかにも前衛のいわるゝ如く、彼れ尋常の接戦より

奇術を施す国風なれば、不意に案じて閑道より全軍

残らず枚を啣み、矢庭に起つて。

皆々 突き破らん。

国 我は是より引返し、猶も挙動を探検なさん。

大 ヲ、行け。

国 ハツ。

ト喇叭の音に成り、国野は馬に打乗り、向

ふへ引返して這入る。

大 此上は片時も早く。

瀧 前衛より進発あれ。

勝 是にて勝崎サーベルを抜き持、立上り。

氣を付け○

ト指揮する。喇叭卒はラツパを吹立る。兵

卒皆々前へ出て整列する。倭は矢張りサー

ベルを抜き、兵卒の前に立つ。

直れ○

ト是にて兵卒皆々下手を向く。

進め。

ト倭先に兵卒の鉄砲持たる分十六人、是を

勝崎指揮して向ふへは入る。皆々見送り。

瀧 続いて右翼、左翼共。

富士・石 枝隊、本隊。

皆々 操出さん。

大 ヲ、○

トサーベルを振るのが道具替りの知らせ。

直れ。

ト号令を掛る。士官、砲兵皆々立直る。此

模様宜敷く喇叭の音、山おろしにて此道具

廻る。

### 安城渡橋梁切断の場

本舞台見附左右に土手を画き、大河の流れ

を見たる中遠見。此前通り一ぱいに架渡し

たる朝鮮形の手摺り付の大橋。但し上の方

にて橋切落す詭らへあり。上下橋台の土手。

此橋の下、浪布を張り、下の方舞台前へ土手の出しかけ。是に柳の立樹。此飾り付能き所に弦月を出し、都て安城渡大橋の体。此見得よろしく浪の音にて道具納る。

ト直ぐバタ／＼に成り、向ふより陳唐林、支那兵の帽子服、劍を抜き持、斥候の拵らへにて走り出て来り、花道にて後ろを見返り。

陳唐林 日本軍の挙動如何にと、物見の為出張せし折柄、攻来る日本勢。此安城の北岸成る土手を伝ふて橋際に進み来らん積りならん。此橋無事に越されては、我軍は忽ち破れん。片時も早く此旨を安城渡の先鋒たる関乱敬氏に注進せん。そふだ○

トいひながら矢張り跡を向き／＼本舞台へ来り、花道際より橋懸りへは入り、直ぐ大臣柱裏通りを出て橋を渡り、上手へは入り、上手の内にて。

隊長／＼大變で／＼る／＼。

関乱敬 何と大變とは。

支那兵皆々 どふかく／＼。

トワヤ／＼いひ乍上手より関乱敬、支那士官の拵らへにて陳唐林に引張られて出る。跡より支那兵大勢、劍鉄砲鋒など抜出て来る。陳唐林、花道の方へ指さして。

陳 弥々来たぞ／＼。

関 ナニ、来たとは何が参つたぞ。

陳 何がといふて日本軍勢が。

支那人皆々 ヤア／＼／＼。

ト皆々うろたへるこなし。

関 シテ、其勢は如何程じや。

陳 夜の目にしかと分らねども、皆悉く白服なれば、月の明りにすかして見るに、其勢凡二三百。

関 ナニ、スリヤ日本軍は、アノ二三百。

支那兵⊕ それは大變だ／＼。

支那皆々 二三百とは情けない。

関 我兵五百に余れども、先は定めて始めの軍なりや、強兵に相違ない。トいふて此俣に一戦にも及ばずして敗走するも口惜しい。

陳 此上は此橋を渡らざるやう工夫が肝要。隊長早く軍略をば。

其軍略は此橋を切て落さば日本勢の道を断切る上策

にて、橋なき川は渡られず。

陳 よし又川を渡るにも、水底深き急流なれば、水心知

つたりとも、中く渡り越す事叶わじ。

支那兵皆々 それでは早く此橋を。

閔 総隊懸つて切り落せ。

支那兵皆々 パアく。

ト支那兵皆々、上手よりまさかりを持ち出て、橋の中央より切り落す事有て、皆々上

手へは入る。此時向ふの内にて。

勝崎 進め○

ト号令する。是にて返し前の倭先に兵卒皆々を指揮して、勝崎大尉出て来り、直ぐ舞台

へ来て。

左り。

ト是にて皆々橋懸りへは入り、矢張り大臣柱裏通りより順に橋の上に出て来李、倭は

橋の落たるを見て。

倭 留れ○

ト兵卒皆々立留る。

勝崎君、是見られよ。清軍已に橋梁をば、切断致してム

るぞ。

ト勝崎見て。

勝 スリヤ敵軍は我隊の進撃なすを相悟り、比興にも通路を断ちしか。扱浅はかなる所業かな。早速工兵を

以て架け渡さんは安けれども、猶予ならざる我先鋒。

たとへいか成る急流にて、浅深知れざる大河たりとも、何程の事やあらん。浅瀬を計り飛入て、南岸に

乗り上らん。

倭 其義然り。

勝 それ、総隊用意せい。

兵卒皆々 ハツ。

ト勝崎はズボンを引上げ、片足を切れ残りの橋の欄干にかけ、下を見込むのが道具替

りの知らせ。

勝 飛込め。

ト皆々寄り懸り、川へ飛込もふといふ見得。此模様よろしく浪の音烈しく、此道具廻る。

## 集團家屋夜戦争の場

本舞台平舞台見附、朝鮮の家屋を建並び、上の方へはすかいに道を画き、家屋の後ろ水田を見たる夜の中遠見。上下に本物の家屋にて、戸の明け立あり。能き所に松の立樹。日覆より同じく釣枝。都て集團家屋夜の体。爰に支那の兵卒、網の着たる傘を背負ひ、提灯を灯し持ち、片手に鉄砲をかたげ、二人立懸り居る。此見得よろしく風の音、合方にて道具納る。

支那兵目 時にモウ何時で有ふな。

◎ されば、今迄月は出て居たが、月が入つてまつくらだ。しかしモウ夜明に間もあるまい。

目 さふで有ふか。シテ、貴さまは今頃迄どこに居たのだ。

◎ サア、聞てくれ。成歎駅の本営から千人計りの我軍を安城渡へ操<sup>繰</sup>り出され、つまらぬ事だと思つたが、其千人の軍勢を五百人づゝふり分て、安城渡へ五百人、其跡の五百人は則ち我等が隊にして、安城渡の予備の爲此集團家屋へ来たのだが、ところで此集團

家屋といふ所は、安城渡など、事替り、敵の寄せ来る氣遣ひない田舎家の事なれば、隊長達も安心して宵から例のなぐさみして居て、とふと皆が寝て仕舞ひ、俺一人りでは仕方なさに、今帰る所だわへ。

目 それは誰もおなじやうな咄しだ。しかし、貴さまのいふ通り、安城渡に残つた隊は、まさかの時は一番に戦ひをせねばならぬ上に、おまけに野陣同様なれど、此手へ廻つた我々は、百姓和布をぼつ払つて其跡へは入り込み、寝たり起たりするのだから、思ふて見れば仕合せだ。

◎ 所が今にも安城渡で戦ひが始まると、集團家屋の総軍もポンと一発鉄砲の音を相図にくり出す手筈だから、安心といふものゝ何時か知れぬとな。

目 そりや当り前の事だ。時に、歸つて寝るとせうか。是で女が有たなら、いひ分<sup>分</sup>はないけれど。

◎ 違ひなした。

兩人 ハ、ハ、ハ、ドリヤ歸らふ。

ト兩人上下の本物の戸口へは入る。矢張り風の音、合方に成り、向ふよりいぜんの勝崎、倭の一隊出て来り、花道にて。

勝 安城渡の急流を難なく渡り越したれども、目ざす敵には逢わずして、弦月さへも入り果て、くらはさくらき其上に、道さへもなき水田の畔。コリヤ困つた事じやなア。

倭 併し程なく夜も明るでムらふが ○

トいひ乍舞台をすかし見て。

ヲ、かすかにあれに人家が見へ升。

勝 ナニ、人家が有るとか ○ ヲ、幸ひく。あれへ参

つて呼び起し、本道へ出る教へを乞はん。

兵卒皆々 それがよろしうムり升る。

倭 我輩先へ参つて尋ねて見るでムらふ ○

ト倭は先へ本舞台へ来り、下手の家の戸を叩き。

ちと物が尋ねたい。眠りを覚すは気の毒なれど、一寸起て貰ひたい ○

ト呼べども返事せぬゆへ、又上手の家の前へ来て同じく叩き起す。矢張り返事せぬゆへ、困つたといふ思入。此内下手の家の後

ろより以前の支那兵、外に二人と三人にて鉄砲を持ち、そつと出て様子を伺ふ。此内

は<sup>ママ</sup> 勝崎は兵卒を引て出て来る。支那兵は皆々をすかし見て、日本軍ならんといふこなしにてツカくと上手へは入ると、直ぐ鉄砲の音。是にて皆々恟りして。

ヤ、呼べど起きざる人家の裏にて。

勝 今の物音心得ず。コリヤ此辺りは支那軍の屯して居る。

皆々 所なりしか。

ト此時上手にて。

支那兵大ぜい それ、日本軍討て取れ。

ト直ぐ鉄砲の音、南京花火の音烈しくなる。

勝 それ打て ○ 勝崎は号令して。

ト是より舞台烟りを焚き、鉄砲の打合に成り、日本兵は打進みに<sup>ママ</sup>倭と共に上手へは入る。勝崎続いて進まんとする時、支那兵の抜刀隊拾人、皆々抜刀を降りかざし、三方より出て勝崎を中に取込め、切て懸るを。

何を。

トいひ乍拾人を相手に立廻りに成り、此内

後ろ烈しき鉄砲の音にて、勝崎立廻りの内、支那兵を一人づゝ切り倒し、十分烈しき立廻り有てトゞ残りの支那兵叶わずして上手へ逃ては入る。勝崎は是を追ふては入る。跡矢張り鉄砲の音烈しく、此道具廻る。

### 同勝崎大尉討死の場

本舞台一面の高式重、草土手。見附黒幕、後に切て落す詔らへ。上下竹藪。都て集団家屋裏土手の体。此見得宜敷く喇叭銅羅太鼓の音、バタ／＼にて道具納る。

ト直ぐバタ／＼に成り、橋懸りより以前の支那抜刀隊の残りを追ふて勝崎出て来り、爰にて又立廻りに成り、此内上下より鉄砲の音烈しく、舞台又烟りを焚き、南京花火をほる。勝崎は是をさけん為、支那兵一人の首筋を片手にとらへ、是を玉除けの桶にして、片手にて皆々と立廻り。此内後ろの黒幕切て落すと、向ふ一面在体、水田を見たる遠見になり、立廻り能き見得にて此道

具を廻し、土手の裏を見せ、爰にいぜんの倭兵卒皆々土手を桶にして鉄砲を打て居る体にて、皆々後ろ向きにこゝみ、後ろへ筒先を向けて居る。此内後ろ遠見の前は一面に烟りを焚き、支那方より鉄砲を打て居る心にて、此時式重の上手を鉄砲の玉にて貫ぬきし体にて件の玉、倭の左の脚に当りしこなしにて。

倭 しまつた。

トいひ乍、尻居に成る。兵卒皆々心付き。

兵卒皆々 少隊長、どふなされた。

倭 イヤ何とも致さぬ。構わず防げ。

皆々 ハツ。

ト矢張り後ろ向にて鉄砲を打つこなし。倭は手早く腰の隠しよりナイフを取り出し、玉を掘り抜き、腰巻を引裂き足をくゝる。此時、土手の裏手にて。

勝 チエ、残念な。

ト倭此声を聞き付け、恠りして。

倭 ヤ、アノ声は慥に勝崎○

著作  
勝諺蔵

ト足の痛むこなしにて、土手をかけ登る見  
得にて道具廻ると土手の裏に成り、爰に勝  
崎は支那兵大勢を切り倒し、其死骸の傍に  
て弾丸に打たれ、刀を突き、苦痛のこなし。  
倭は土手より是を見て、転げ落ちながら勝  
崎の傍へ寄り。

勝崎氏。

勝 ヲ、倭か。チエ、残念く。

トいひ乍じりくと落入る。倭は是(ママ)に介抱  
しながら。

倭 勝崎氏、直臣どの。心を慥かに持玉へ。勝崎ど  
の ○

ト呼べども、こたへなきこなしにて。

ヤ、コリヤモウ息が絶へ果たか ○チエ、。

ト向ふを白眼むのが木の頭にて。

口惜しい。

ト勝崎の死骸に取り付き、愁ひのこなし。

此模様矢張り南京花火の音、支那軍の鳴物  
にて

ひやうし幕

## 大詰

日本大勝利

大詰 成歎壘大戦争の場

牙山陣営占領の場

素砂場凱旋の場

大詰

成歎壘大戦争の場

牙山陣営占領の場

素砂場凱旋の場

役人替名

一 瀧田中佐

一 大富公使

一 騎兵岩尾貫一

一 渡辺大尉

一 石島少佐

一 広木少尉

一 清軍総督葉志超

一 同副総督聶士成

一 同斥候陳永海

一 同士官閔乱敬

一 同 江自庚

一 同 魏家訓

一 富士島中佐

一 王使 李允用

一 大城旅団長

一 日本兵 大勢

一 支那兵 大勢

一 日本属官 二人

一 朝鮮属官 二人

## 成歎壘大戦争の場

本舞台平舞台見附裾通り、凸凹の壘を画きたる山の中遠見。上下黄色に赤緑りを取りし陣幕を張り、此内に清国の旗あまた建列ね、日覆より松の釣枝。都て成歎駅清軍營中の体。爰に真中に葉志超総督、聶士成副総督の形り、江自庚、魏家訓士官の形りにて曲録に腰を掛て居る。此上下に支那兵大

勢、得物を持ち控へ居る。此見得よろしく  
喇叭の音、銅羅太鼓の音にて幕明く。

葉志超 如何に各く。先刻斥候の注進には、日本軍の  
先鋒は安城渡迄寄せ来り、戦斗を始めたところ、  
勝敗如何にと思わるゝぞ。

聶士成 されば、我軍先鋒には、安城渡の橋を落し、防  
禦致すと有るからは、たとへ日本軍勢が幾万騎にて  
押寄るとも、何として大河をば渡り越す事成り難し  
と、此聶士成は推測致す。

江自庚 副総督の仰せの如く、当成飲の我軍が力と頼む  
安城渡。大河を隔て、味方より弾丸惜まず乱発なし。  
魏家訓 日本勢のひるむ所を我軍よりは一声に透かさず  
追撃致しなば、敵の軍勢一人も余も生きては。

皆々 歸るまじ。

葉 ホ、ウ勇ましき各々が推測。葉志超安堵致す。又、  
万に一つ日軍に安城渡を破らるゝとも、当成飲の堅  
塁は朝鮮無双の要害なれば、味方に取ては大丈夫。  
聶 何は然れ、開戦の様子が聞度き。

皆々 者でゑる。

ト是を又銅羅太鼓の音、バタ／＼に成り、

向ふより陳永海、支那斥候兵の拵らへにて  
弁髪に鉢巻をして鉾を携へ、走り出て来り、  
花道にて。

陳永海 帷幕の内へ御注進。  
ト皆々是を見て。

葉 ヲ、汝は斥候陳永海。シテ先鋒の。  
皆々 様子は如何に。  
陳 ハツ、夫へ参つて申上げん。○

ト右の鳴物にて本舞台へ走り来り。

拙者、総督の下知に依り安城渡へ出張なし、拳動探検致  
せし折柄、日本軍の先鋒は切つたる橋に渡り得ず、  
安城渡の川上より集団家屋に踏迷ひ、我遊軍の屯な  
す所へ来りし夫故に、思ひもふけぬ我軍は、矢庭に  
起つて敵勢を中に取込め突戦なし、我軍勝利を得た  
れども、本手に備へし安城渡は、日本軍の後陣の手  
に攻撃受て我軍には喰止め難く見へてゑる。

葉 ヤ、スリヤ、集団家屋で我軍が勝利を得たるも、肝  
心の安城渡が。

皆々 危く成りしか。ヤ、／＼、／＼。

ト是を又バタ／＼に成り、向ふより前幕の

閑乱敬、手疵を受しこなしにて走り出て来り、直ぐ舞台へ来り。  
閑乱敬 葉総督、一大事でゝるく。  
ト皆々是を見て。

葉 ヲ、其方は先手の大将。

聶 閑乱敬の。

皆々 此体は。

閑 ホ、日本勢に打破られ、無念にはゝれ共、討死するは無益なりと、此如く手疵を受け、命からゝ引上たり。

皆々 ヤ、ゝ、ゝ、ゝ。

ト皆々恟りする。

閑 総督には早く防禦の手配りく。

葉 ヲ、いふにや及ぶ。日本勢。

聶 此成歡に近寄らば。

陳 皆殺しに。

皆々 致してくれん。

葉 それ方く。

ト長烟管を捨るを道具替りの知らせ。

用意致せ。

皆々 パア。

ト皆々立上り、うろたへるこなし。此模様宜敷く銅羅太鼓喇叭の音にて道具廻る。

本舞台高式重、岩の蹴込。此上前通り凸凹の罫を築きし張物。真中大砲にて打破る詔らへ。此内に清軍の簞数多建て、後ろ山中遠見。上下岩山の出しかけ。日覆より松の釣枝。都て成歡清軍保罫の体。爰に堀の内より支那兵大勢半身出て鉄砲を並べ居る。此見得よろしく右の鳴物にて道具納る。

支那兵○ そりや、日本勢が押寄せた。

□ 近付くやつらを片つぱし。

△ 覘ひ構わずめつた打ち。

× 皆殺しに。

皆々 殺してくれん。

ト是を南京花火、鉄砲の音に成り、支那兵皆々鉄砲を打つこなし。此時向ふにて喇叭の音して。

大城 灌田 進め。

大城 枝隊長。  
瀧 旅団長。

石島  
渡辺 進め。

ト号令を掛け、是をバタ／＼に成り本花道より砲兵二人、大砲を引き、石島少佐日の丸の指揮旗を振り、次に富士島中佐サーベルを抜き持ち、其次に広木少尉日章の付きし聯隊旗を持ち、其跡より大城少将サーベルを抜き持ち、兵士二人を随へ、仮花道より渡辺大尉、指揮旗を振り、兵卒大勢鉄砲をさし向け、其次に瀧田中佐サーベルを抜き持ち、双方一時に走り出て来り、花道より大砲鉄砲一時に舞台へ打込む。是にて花火、烟りを焚き、真中の壘打砕ける。支那兵皆々、ハアと泣き乍引込む。両花道の人数は皆々舞台へ来り。

ト石島は砲兵の指揮をしながら大砲を引て上手、渡辺は鉄砲兵の指揮をして壘の破れより二重の真中へは入る。大城、富士島、広木、瀧田と顔見合せ。

富士 瀧田君には安城渡の。  
広 お働きは実に感心。  
瀧 本隊のお手際程にはムらぬ。  
大 左様でない。何は兎もあれ。  
瀧 此虚に乗じて。  
皆々 それ。

ト瀧田は矢張り壘の破れより真中へ、富士島、大城、広木の一手は上手へと別れては入る。是を矢張り鳴物バタ／＼に成り、橋懸りより岩尾貫一騎兵の帽子服にて腰に支那兵の切り首四つ計り左右にく／＼り付け、抜刀にて支那兵大勢と立廻りながら出て来り。

岩尾 ヤア我日本に敵たふなど、は身の程知らぬチャン／＼坊主め。うぬらが首をい／＼に腰に提げるも面倒だ。イデなで切りに致しくれん。  
支那兵皆々 パツ／＼／＼／＼打とれ。

ト是より岩尾は支那兵を相手に、めつた切りの立廻りあつて、ト上手へ皆々を追ふては入る。始終喇叭と銅羅太鼓の鳴物にて

真中の破れより瀧田中佐は支那の抜刀兵を  
大勢と立廻り乍出て来り。

瀧 ヤア、しほらしき豚尾漢。瀧田中佐が手並を見よ。

支那兵皆々 何を。

ト立廻りよろしく有て皆々を橋懸りへ追ふ  
ては入る。バタ／＼に成り、上手より葉志  
超并に聶士成、閔乱敬いづれも抜劍にて、  
其跡より支那兵二人龍の旗と直隸省練軍の  
旗とを持ち、抜刀兵四人逃て出て来り、此  
跡より瀧田中佐一人にて是を追ふて出て来  
り。

瀧田 清軍総督、待て。

葉志超 聶士成 それ喰止めよ。

支那兵四人 パア／＼。

ト瀧田に切て懸る。瀧田は支那兵を切り払  
ひ、葉志超、聶士成に切て懸る。是にて又皆々  
瀧田に懸る立廻りに成り、此内瀧田は葉志  
超を一刀切り付る。葉志超ワアといひなが  
ら下手へ倒るゝを、兵四人は旗持共に瀧田  
を支へる。瀧田は是を切り払ふ。是にて閔

乱敬、瀧田を又支へる。瀧田見て。  
瀧 汝は安城渡の先鋒。まだ生きておつたか。

閔乱敬 何を。

トいひ乍一寸立廻り有て、ト、閔乱敬、瀧  
田に切倒さるゝ。是にて旗持兵二人、旗に  
て瀧田を支へる。瀧田は二本の旗を二ト掴み  
にして引抱へて。

瀧 総督の旗○

ト引たくりながら兩人を見事に切り返すの  
が道具替りの知らせ。

奪ひ取たり。

ト此内に葉志超は聶士成に助けられ、向ふ  
へいつさんに逃ては入る。瀧田は旗を詠め、  
急度成る。此見得よろしく矢張り軍の鳴も  
のにて、此道具廻る。

本舞台平舞台、見附裾通り岩山の張物。向  
ふ海原の中遠見、上下松の立樹。日覆よ  
り同じく釣枝。都て金城洞より牙山湾を見  
たる本道の体。爰に前幕の国野忠蔵は、以

前の魏家訓、江自庚の兩人を喰とめて居る。此見得、右の鳴ものにて道具納る。

国野 ヤア、成歛を打破られ、逃んと致す豚尾漢。日本軍の騎兵たる此国野忠蔵が目懸つたる上からは、日本刀の切れあぢ見よ。

江自庚  
魏家訓  
何を。

ト兩人剣にて切て懸る。国野は兩人と立廻り烈しくあつて、ト支那兩人叶わず逃ては入るを、国野上手へ追ふては入る。直ぐバタ／＼に成り、向ふより以前の葉志超疵を受け、聶士成に手を引かれ、跡より支那兵一人白の大きな風呂敷包みを背負ひ、付添ひ走り出て来り、花道にて。

葉志超 なんと副総督。此葉志超は苟くも四百余州の諸將の内、李鴻章殿に撰まれて、牙山総督の任を帯び、此朝鮮へ出陣せしより、日本勢の押寄せなば皆殺しと思ひの外、安城渡はいふに及ばず、成歛の要害迄皆悉く打破られ、味方の死傷は千人計り。予も此如く手疵を受け、豊島沖の開戦といひ、二度の不覚を取たるは、如何にも無念でムらぬか。

聶士成 そりや此聶士成とて同じ事。併し勝敗は軍の習ひ。たとへ幾度負るとも、始終の勝を勝とすると、我清国の古人の金言。総督更に悔む事なかれ。何は然れ、斯様な愚痴を翻して居る内日本軍の目に懸らば、爰迄逃た勞して功なし。

葉 如何にも此上は一命が大切。逃る軍慮を廻らす肝要。

聶 其儀は決して氣遣ひ召るな。逃る用意は致してあれば、兎も角も先づあれまで。

葉 然らば聶士成どの。  
聶 葉將軍。

葉 兵卒参れ。  
支那兵 パア／＼。

ト右の鳴物にて本舞台へ来り。  
葉 シテ、その逃る軍略は。

聶 外でもムらぬ、其品是へ。  
支那兵 パア／＼。

ト風呂敷包をおろす。聶士成は包みを解き、中より朝鮮人の男女の服と帽子、被を取出して、葉志超の前へ出す。

葉 シテ、此品は。

聶 是こそ拙者予てより遠きおもんばかりをもつて、ま

さかの時の逃げ支度に朝鮮人の男女二人りが衣服を  
はぎ取り貯へ置たり。是成る衣服にぬぎ替へて、朝  
鮮人の姿にやつし逃る時には、目に懸つても大丈夫。

葉 いかさま軍略もあればあるもの。貴殿は正しく今孔  
明。

聶 無駄をいわずと少しも早く。

ト兩人捨せりふにて支那軍服をぬぎ、葉志

超は女服を着てかつぎを冠る。聶士成は男

服を着て帽子を冠る事有て、兵卒は脱捨を

元の風呂敷へ包み。

支那兵 シテ、総督方には是より何国へ。

葉 牙山の方は敵軍が定めて占領致せしならん。

聶 是より道を左りに取り、洪州へ落延て、敗軍兵と。

兩人 一つに成らん。

支那兵 シテ、私は。

葉 支那兵卒の姿にて自共等〔身〕に付添ひおらば、化の皮が

頭われん。

聶 其方は道を替へ日本勢の目に懸らば、直ぐに降参致

して仕舞へ。

支那兵 何の事だ、馬鹿くしい。

ト是を又喇叭の音烈しく成る。兩人恟り向  
ふを見て。

葉 そりやこそ又も日本勢。

聶 イヤ、逃ては却て露頭の元。コリヤ其方は早く逃  
げく。

ト是にて兵は風呂敷包みを背負ひ、上手へ  
逃ては入る。是をバタ／＼に成り、向ふよ  
り支那兵大ぜい逃て出るを、以前の渡辺大  
尉指揮旗を振り、日本兵に号令して追ふて  
出て来り、直ぐ舞台へ来り。

渡辺 それ逃すな。

日本兵皆々 ハツ。

ト一寸立廻り有る。此内葉志超、聶士成は  
後ろへ寄つて震へて居るを、渡辺見て。

渡 朝鮮人はあふない。怪我せぬ様に逃るがよいぞ。

葉・聶 有難うムリ升。

ト此内支那兵叶わず上手へ逃ては入るを、  
渡辺は日本兵の指揮をして。

渡 進撃致せ。

日本兵皆々 ハツ。

ト皆々上手へ追ふては入る。葉志超、聶士成ホツトしたるこなし有て前へ出で。

葉 ヤレ恐ろしい事であつたが、成程敵の目に懸つてもあぶなげなしの此姿。

聶 此上はちつとも早く。

葉 洪州さして。

聶 サア、来玉へ。

ト聶士成は葉志超の手を取り、早い合方に成り兩人仮花道を向ふへは入る。よろしく此道具廻る。

### 牙山陣営占領の場

本舞台通りの高式重。岩山の蹴込み。上下山の出しかけ。向ふ支那陣営倉庫并に仮家を描きたる山の中遠見。日覆より松の釣枝。都て牙山支那陣営跡の体、爰に能き所に大砲、鉄砲、長槍、幕、旗等の縄からげにして有るを集め置き、二重の真中に大城少将。

此傍に広木少尉、聯隊旗を持ち、上の方に富士島中佐、石島少佐。下の方に瀧田中佐。

何れも支那曲録に腰を掛け、平舞台真中に岩尾、国野の両騎兵、抜刀を持ち息込み立懸り居る。上下に砲兵、歩兵、喇叭卒皆々整列して居る。此見得よろしく喇叭の音にて道具納る。

岩尾 長官始め隊長方、斯く牙山の根拠迄、我軍進んで乗つ取りたるに、比興未練な支那軍隊。只一人りもおらざるは、成歎駅の激戦に。

国野 我攻撃に当り難く、大将始め総軍隊、惣崩れに崩れ立ち、敗走せしと覚へたり。

岩 山を。いまだ遠くは逃るまじ。進撃なして支那軍が死人の山を。

兩人 築いてくれん。

ト行ふとするを。

大城 ア、コリヤ待てて。血氣に逸るは尤もなれども、此度の戦争は当牙山の支那軍を撤回させん目的にて、斯く敗走致せし上は、日本の名誉是に過ぎず。長追致すは無益なるぞ。

岩 じやと申して此俣に見逃がし難き。  
兩人 豚尾漢。

富士島 イヤ、長追は宜敷くない。此行先は嶮山にて、甚だ通行難義といひ、名におふ敵は大軍にて。

石島 幾千万とも計り難き、今敗兵を切つたりとも、何の益にもなり難し。

岩 其大軍故、又候要所、切ツ所に踏み止り。

兩人 備へを立んも計られねば。

瀧田 イヤ、何として敗兵の踏止まる勇氣あらん。其証

抛は是を見よ。敵に取つては大切なる大将の旗及び

幕、大砲、小銃、長槍迄奪ひ取らるゝそれ計りか、

捨て逃たる体なれば、余程狼狽せしと見へたり。斯

程にもろく怖気立ち、臆病風に引かれし敵軍。おそ

らく朝鮮八道の内に足を止むる所はあるまじ。

ト是にて兩人じつと控へて。

岩 誠に仰せ御尤も。兵卒の自分として長官方へ恐れ気

なく、詞を返し奉りしは重々の不敬。

国 何卒御免。

兩人 下され升ふ。

大 何々、軍令背くといふにあらず。逃るを追わんと致

せしは、其方等が勇壮なり。予は甚だ賞し置くぞ。  
兩人 恐入り奉り升る。

大 シテ、当陣の収奪品は。

富士 只今宮中点検せしに、向ふに建てし倉庫には弾丸

凡五十万発、兵糧米は二千俵。

石 其外火薬一棟には地雷火用の爆裂薬、兵士の軍服、

軍用の提灯、傘山の如し。

瀧 今此所に集めしは、大将の旗二流。其外小旗七十本。

大砲八門、小銃は其数凡八百挺、長槍百本、幕五十

張り、銅羅太鼓の軍器より諸雑品に至りては容易に

かぞへ難けれども、大略是へ控へ取たり。

ト手帳を出して控へ乍いふ。大城思入有て。

大 斯程迄に兵糧万端貯へ置きし所を見れば、定めて当

所へ出張の兵士も多く居たならんが、能く一人も

残らずして、手ばしこくも敗走せしよな。

瀧 実に支那兵は、進むより逃る方には一体に能く研究

を致したものだ。

皆々 アハ、ハ、ハ、ハ、ハ。

ト此時橋懸りの内にて。

渡辺 イヤ、其敗軍の残兵、只今それへ引立升る。

ト喇叭の音に成り、橋懸りより以前の渡辺大尉幕明きの陳永海の弁髪を持ち、連れ出て来る。皆々見て。

富士 君は渡辺大尉。皆々 シテ、其者は。

渡 是ぞ敵勢敗軍の道におくれて、人家に隠れ忍びおりしを召捕つたは敵の人数其他の事実、取調べん其為に引立て参つてムリ升。

陳永海 何卒日本の大将、情けを以て私の命計りはお助けく。

ト手を合して泣く。瀧田思入有て。

瀧 我日本は君子国。其方共の命をとつて何かせん ○

シテ、汝が姓姓名は。

陳 陳永海と申升。

瀧 シテ、職掌はどふだ。

陳 直隸練軍付斥候兵、是でも先年仏蘭西と戦争の砌りには、無数の手柄致せしもの。

大 イヤ、其履歴聞て要なし。先其方に尋ね度は、敗走軍は何れより何れをさして落行きしぞ。

陳 洪州より迂回して平壤に引上る最初よりの予定であ

り升。

岩 スリヤ、初めより逃道を。

国 予て定め。

両人 置たりとな。

瀧 シテ、惣勢は如何程成るぞ。

陳 我国の兵制は一営が五百人にて、当牙山へ来たる兵は十一営の大軍にて、其数五千五百人。其内今日死傷せし者は凡一千五百人。

瀧 ハテ、思ふたよりは大軍であつた。

富士 其大軍も五時間に。

渡 足らぬ時間に打破り。

石 我軍勝利得たりしも。

広木 我大君の。

皆々 皆御威徳。

大 此上は分捕品の内、要なき物は焼捨て其他は一々札を付け、万里倉に運送なし、素砂場迄引上ん。

瀧 総隊凱陣。

皆々 ハア、。

ト皆々立上る。是にて浅黄幕冠を冠せる。跡君が代の奏樂に成り、後る道具出来次第、

浅黄幕を切て落す。

### 素砂場凱旋の場

本舞台平舞台。向ふ所々にズツクの幕を張りし日本陣営の遠見。上下矢張り幕を張り、此前に日本の国旗と朝鮮の国旗。又は「凱陣歓迎」「日本万歳」「朝鮮万歳」など、大書したる旗を沢山に建て、上手は「万国」と記したる菰樽の積み物。下手は支那分捕品の旗、大砲、小銃、諸品を積み、是に「清兵大敗の証」と大書したる木札を付け、宜敷く飾り、都て素砂場陣営の体。爰に上手に大富公使大礼服帽の形り、此傍に燕尾服帽の属官二人付添ひ、此上手に李允用朝鮮服帽子形り王使にて朝鮮の属官一人付添へ、立懸り居る。下手に大城少将、瀧田中佐、富士島、渡辺、石島、広木、岩尾、国野の両騎兵立並び、兵卒は上下へ別れて整列して居る。此見得よろしく奏樂にて道具納る。

公使 旅団長大城少将及び其隊の将校下士兵卒に至る

迄、成歓、牙山の一戦に清軍を打破りし全軍の勝利を祝し、全権公使大富圭助。

李允用 我国王に於ても諸君が勇戦、大勝利に叡感斜めならずして、則ちかくいふ李允用、使命を奉じて公使と共に。

公 是迄歓迎。

皆々 致したり。

大城 是はく、我公使を初め、朝鮮王使、其他諸君にも優待御歓迎、鳴謝するに言葉なし。

瀧田 先に報道致せし如く、五千に余る清軍を暫時にして打破り、既に敵勢死傷する者一千五百余人にして、我軍には無事を奏せり。

富士島 殊に収奪品に至りては、兵糧軍器山の如く、皆悉く所置をつけ。

瀧 御覽の如く黄龍の側は清軍総督が尤も大事の章にして。

石島 我日本へ分捕せしは、清軍大敗、我軍の。

広木 勝利を示す二流の旗。

岩尾 其外支那の樂器迄。

国野 万国中に鳴り響く。

大 我軍隊の。

皆々 尚武のほまれ。

公 是も偏に大君の威徳に進む將校が、正しき指揮に朝鮮の独立国と保証する。

李 日本政府の信義にて、開化に進む。  
皆々 国家の悦び。

ト是を又奏樂に成り。

公 天皇陛下万歳。

皆々 天皇陛下万歳。

大 朝鮮大国王陛下万歳。

皆々 朝鮮大国王陛下万歳。

李 日本軍隊万歳。

皆々 日本軍隊万歳。

ト是を樂に合して唱へ、よろしく有て。

○ 東西、先今日は是限り。

ト目出度

打出し

著作 勝諺藏



豊原国周「松崎大尉進撃図」明治27年（1894）